

# 竹 下 遺 跡

— 第 IX 次 調 査 —

平成26年3月

宇都宮市教育委員会



竹下遺跡第Ⅱ次調査区全景（南西から）



SK07 土器出土状況（西から）

## 序

本遺跡は、昭和28年に宇都宮大学で調査して以来、縄文時代の遺跡として著名で、今回の調査で9回目の調査となります。何れも個人住宅建設等の小規模な調査であるため、遺跡の全体像がわかりませんが、縄文時代の中期～後期にかけての大規模な集落跡であったと考えられます。

今回の調査は、平成23年3月11日に起きた東日本大震災により被害を受け、家を移転するにあたり、移転先の建設予定地が本遺跡地内であることから発掘調査を実施することになりました。緊急事態でありながら調査にご協力を頂きました地権者には厚く御礼申し上げます。

調査の結果、本遺跡の中心にあたる今回の調査区部分が、当初は袋状土坑等の貯蔵空間として使用され、その後竪穴住居が造られ、居住空間に変わったことが判明しました。

本報告書は、その成果をまとめたものであり、多くの方々がさまざまな方面でご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、埋蔵文化財の取扱い協議から発掘調査に多大なるご協力とご理解をいただきました、地権者並びに関係各位に対しまして、厚く御礼申し上げます。

平成26年3月31日

宇都宮市教育委員会

教育長 水 越 久 夫

## 例 言

- 1 本報告書は、栃木県宇都宮市竹下町宇南西原504-1に所在する竹下遺跡に関する発掘調査報告書である。
- 2 竹下遺跡の調査は、個人住宅建設に伴う調査で、平成23年度に国庫補助事業として実施したものである。
- 3 調査期間は次のとおりである。  
平成23年8月9日～平成23年9月13日
- 4 調査対象面積は次のとおりである。  
500㎡
- 5 本遺跡の発掘調査での測量、写真撮影等は、大塚雅之・江川尚美・今平利幸・石川和弘・前原義之・君島直人・近藤真・柴正美がこれにあたった。
- 6 遺構・遺物の整理、実測などは、上野とも子、齊藤しのぶ、中山真理、倉田有子、鈴木千佳子、村上啓子、川津淳子、阿久津とよ子の協力を得て、今平利幸がこれにあたった。また、遺物の写真撮影は、今平利幸、中山真理、倉田有子がこれにあたった。
- 7 本書の執筆は今平がこれにあたった。
- 8 本遺跡出土の遺物及び図面・写真は、宇都宮市教育委員会で保管している。
- 9 発掘調査の関係者は次のとおりである。

[調査主体]

[指導助言]

宇都宮市文化財保護審議委員会委員 竹澤 謙

” 橋本澄朗

宇都宮市教育委員会 教育長 伊藤文雄

教育次長 手塚敏男

調査担当 文化課長 高橋充史

文化課長補佐 伊藤泰拓

文化財保護係長 大塚雅之

文化財保護係 江川尚美・今平利幸・石川和弘・君島直人・前原義之・

近藤真・阿部雅子・柴正美・降幡敏彦

[調査補助員] 阿久津和子・阿久津克己・阿久津陽子・入江つや子・入江タカ子・入江通子・小池幸子・小森行雄・篠原信子・住谷昭・日高澄子・新井みや子

- 10 発掘調査の実施並びに本書の作成にあたっては、栃木県教育委員会の指導を受けるとともに次の諸機関及び諸氏のご指導を賜った。記して感謝を表したい。(順不同、敬称略)  
(公財)とちぎ未来づくり財団 埋蔵文化財センター、高橋康夫、江原英、猪瀬美奈子

# 目 次

巻頭図版

序・例言・凡例・目次

## I はじめに


1 調査の経過	1
2 遺跡の環境	3

## II 調査概要

1 竪穴住居跡	6
2 土坑	21
3 遺構外の出土土器	53
4 土製円盤	53
5 石器	53

III おわりに	65
----------	----

# 凡 例

1. 挿図の縮尺は、遺構が1/60とし、遺物は1/3、1/2で示した。また、遺物実測図番号は遺構平面断面図の番号及び図版の遺物番号と一致する。
2. 断面図基準線は標高であり、平面図の方位は真北を示す。
3. 遺構実測図の土層説明においては、次の略号を使用した。  
ローム粒…LR ロームブロック…LB 今市パミス…IP 七本桜パミス…SP 炭化物…C
4. 遺構においては次の略号を使用した。  
竪穴住居跡…SI 土坑…SK 不明…SX
5. 挿図中の  は焼土を示す。

## 挿 図 目 次

第1図	調査区位置図	3
第2図	周辺遺跡分布図	5
第3図	調査区全体図	7・8
第4図	土層断面図	9
第5図	SI04・SI11・SI28平・断面図	10
第6図	SI26・SI38A・SI55A平・断面図	11
第7図	SI41・SI42・SI43平・断面図	12
第8図	SI69平面図	13
第9図	SI04出土遺物実測図	14
第10図	SI11出土遺物実測図	15
第11図	SI26・SI38A出土遺物実測図	16
第12図	SI41出土遺物実測図	17
第13図	SI42・SI62A出土遺物実測図	18
第14図	SI43・SI55A出土遺物実測図	19
第15図	SK06・SK07・SK10・SK15・SK25・SK46平・断面図	22
第16図	SK29・SK34・SK53・SK48・SK60・SK58・SK62B平・断面図	23
第17図	SK03・SK06出土遺物実測図	24
第18図	SK07出土遺物実測図(1)	25
第19図	SK07出土遺物実測図(2)	26
第20図	SK09出土遺物実測図	26
第21図	SK10出土遺物実測図	27
第22図	SK13出土遺物実測図	28
第23図	SK15出土遺物実測図(1)	29
第24図	SK15出土遺物実測図(2)	30
第25図	SK16～SK18・SK20出土遺物実測図	30
第26図	SK21・SK22出土遺物実測図	31
第27図	SK23・SK24出土遺物実測図	32
第28図	SK29出土遺物実測図	33
第29図	SK25・SK27・SK30・SK31出土遺物実測図	34
第30図	SK34出土遺物実測図	35
第31図	SK36・SK38B・SK39・SK40出土遺物実測図	36

第32図	SK44～SK47出土遺物実測図	37
第33図	SK48出土遺物実測図	38
第34図	SK52出土遺物実測図	39
第35図	SK53出土遺物実測図(1)	39
第36図	SK53出土遺物実測図(2)	40
第37図	SK54・SK57・SK58出土遺物実測図	41
第38図	SK60出土遺物実測図	42
第39図	SK62B出土遺物実測図(1)	43
第40図	SK62B出土遺物実測図(2)	44
第41図	SK61・SK63出土遺物実測図	45
第42図	遺構外の出土遺物実測図	55
第43図	土製円盤遺物実測図	56
第44図	石器遺物実測図(1)	58
第45図	石器遺物実測図(2)	59
第46図	石器遺物実測図(3)	60
第47図	石器遺物実測図(4)	61
第48図	石器遺物実測図(5)	62
第49図	石器遺物実測図(6)	63
第50図	石器遺物実測図(7)	64
第51図	石器遺物実測図(8)	65

## 表 目 次

第1表	調査経過表	3
第2表	周辺遺跡一覧表	4
第3表	土製円盤一覧表	54
第4表	石器一覧表	57
第5表	遺構一覧表	67

## 図 版 目 次

### 巻頭図版

	竹下遺跡第IX次調査全景 (南西から)
	SK07土器出土状況 (西から)
PL1	①SI04遺構確認状況 (南東から)
	②SI04遺物出土状況 (南から)
PL2	①SI26・SK23セクション (南東から)
	②SI26遺物出土状況 (西から)
PL3	①SI41・SK44セクション (東から)

	②SI41遺物出土状況 (西から)	PL13	①SK16出土遺物
PL4	①SI43・SK64・SK65遺構確認状況 (南から)		②SK17出土遺物
	②SI43石囲炉完掘状況 (北から)		③SK18出土遺物
PL5	①SI42石囲炉完掘状況 (北から)		④SK20出土遺物
	②SK10・SK21・SK54確認状況 (北から)	PL14	⑤SK21出土遺物
PL6	①SK07遺物出土状況 (西から)		⑥SK22出土遺物
	②SK10完掘状況 (北から)		①SK23出土遺物
	③SK15・SI41セクション (南から)		②SK24出土遺物
	④SK25セクション (南西から)		③SK25出土遺物
	⑤SK24遺物出土状況 (東から)	PL15	④SK27出土遺物
PL7	①SK29遺物出土状況 (西から)		⑤SK29出土遺物
	②SK47完掘状況 (北から)		①SK30出土遺物
	③SK47遺物出土状況 (北から)		②SK31出土遺物
	④SK48遺物出土状況 (西から)		③SK34出土遺物
	⑤SK53完掘状況 (東から)	PL16	④SK36出土遺物
	⑥SK53遺物出土状況 (東から)		⑤SK38B出土遺物
	⑦SK58遺物出土状況 (北から)		①SK39出土遺物
	⑧SK63・SK67完掘状況 (西から)		②SK40出土遺物
PL8	①SK62B遺物出土状況 (西から)		③SK44出土遺物
	②遺跡全景 (東から)		④SK46出土遺物
PL9	①SI04出土遺物	PL17	⑤SK45出土遺物
	②SI11出土遺物		⑥SK48出土遺物①
	③SI26出土遺物		①SK48出土遺物②
	④SI38A出土遺物		②SK52出土遺物
PL10	①SI41出土遺物	PL18	③SK53出土遺物
	②SI42出土遺物		①SK54出土遺物
	③SI62A出土遺物		②SK57出土遺物
PL11	①SI43出土遺物		③SK58出土遺物
	②SI55A出土遺物		④SK60出土遺物
	③SK03出土遺物	PL19	⑤SK61出土遺物
	④SK06出土遺物	PL20	⑥SK63出土遺物
	⑤SK07出土遺物		①SK62出土遺物 ②表採
PL12	①SK09出土遺物	PL21	①土製円盤 ②石器①
	②SK13出土遺物		①石器②
	③SK10出土遺物		
	④SK15出土遺物		

## I はじめに

### 1 調査の経過

平成23年7月19日に竹下町字南西原504-1において個人住宅の建設が計画され、予定されたためトレンチによる確認調査を実施した。その結果、縄文時代の竪穴住居跡及び土坑が確認された。

今回の住宅建設は、同年3月11日に発生した東日本大震災の被害により転居を余儀なくされた結果、この場所に住宅を建設せざるを得ないという状況にあったことから、国庫補助の市内遺跡調査を導入し調査を行った。

調査は平成23年8月9日～9月13日の期間で行った。竹下遺跡の中心部に当たることから遺構がかなり密集した状態であった。遺構は建物の基礎により壊される深さの約2mまでを行った。このため、かなり深い袋状土坑等は遺構が保存されることから、完掘していないものがある。また、隣接して納屋が建てられる予定となっているが、基礎が浅いことから遺構の確認のみを行った。

調査の結果、竪穴住居跡11軒、土坑47基が確認された。

本遺跡は昭和28年に宇都宮大学郷土史研究班が最初に調査を行って以来、これまでに8回の調査が行われている。そのほとんどが、個人住宅建設に先立つ事前調査で、遺跡の内容が断片的にしかわからない。

第Ⅱ次調査では、遺跡のほぼ中央の調査で、土坑が217基確認されている。土坑には深さが1m以上で袋状の断面形の貯蔵用のものと、深さが50cm前後の比較的浅いものがあり、ここから出土した遺物は、縄文時代中期前葉から後期後葉のもので、主に中期中葉の時期の遺物が多く出土している。

第Ⅲ次調査は、Ⅱ次調査区の南東部にあたり、13軒の竪穴住居跡が確認されている。竪穴住居跡は直径4～5mの円形もしくは楕円形のもので、大部分のものは中心に石囲炉があり、壁に柱穴がめぐる。特にS101とS109は、出入口部分と思われる溝が対になって外側に張り出す状況が確認されている。なお、これらの住居跡からは後期の加曾利B式の土器が出土している。

第Ⅴ次調査は、Ⅱ次調査区の北東部にあたり、2軒の竪穴住居跡と土坑が36基確認されている。袋状土坑が多く確認され、出土遺物から中期を中心とする時期と考えられる。

第Ⅶ次調査は、国指定史跡飛山城跡への進入路建設に伴う発掘調査で、本遺跡の西側縁辺部分に当たる。3軒の竪穴住居跡と土坑が数十基確認されているが、遺跡の中心部に比べ遺構の密度は希薄である。出土遺物から中期を中心とする時期と考えられる。

第Ⅷ次調査は、A区とB区の2箇所で行われた。調査の結果、竪穴住居跡13軒、土坑66基が確認できた。B区の住居跡は中期後半から後期初頭にかけてのもので、中でもS101で出土した縄文土器は現存する器高が82cm、口径が60cmと非常に大形のものである。

以上の調査から、平地式住居跡1軒、竪穴住居跡34軒、土坑430基以上が確認され、本遺跡が南北300m、東西200mの規模で、縄文時代中期から後期にかけての拠点的な集落跡であることが判明している。



【調査日誌抄】

- 8月 9日 重機による表土剥ぎを開始。
- 8月10日 重機による表土剥ぎ。テントの設置。ジョレンがけによる遺構の確認。
- 8月11日 ジョレンがけによる遺構の確認。基本土層のセクション図作成。
- 8月12日 ジョレンがけにより遺構の確認。1号～8号の掘り下げ。
- 8月17日・18日 ジョレンがけにより遺構の確認。6号～11号の掘り下げ。
- 8月23日 14号・15号の掘り下げ。新たに20号～26号を設定し、掘り下げ開始。
- 8月24日 3号・6号・10号・13号・21号・22号・26号の掘り下げ。10号セクション写真撮影。
- 8月25日 11号・4号・26号の掘り下げ。6号・8号・9号のセクション写真撮影後、セクション図作成。10号・20号・27～29号の掘り下げ。
- 8月26日 7号・20号・27～29号・31号・34号の掘り下げを行い、セクションを清掃後写真撮影。4号・6号・10号のセクション図作成。
- 8月29日 2号・11号の掘り下げを行い、清掃後セクション写真撮影。4号・26号の掘り下げ。
- 8月30日 8号・10号・22号・25号・30号・35号の掘り下げ。26号は竪穴住居跡と考えられ、23号・25号に切られる。
- 8月31日 3号・4号・13号・18号・22号・35号・40号の掘り下げを行い、清掃後写真撮影。4号の竪穴住居跡は、その出土土器から称名寺式期のものと考えられ、18号・22号・35号の袋状土坑を切る。
- 9月 1日 42号・43号の集石状況の写真撮影。25・45号の掘り下げを行い、清掃後写真撮影、その後セクション図作成。
- 9月 2日 26号土器出土状況写真撮影。47号の掘り下げ後セクション図を作成、その後清掃をし、写真撮影。
- 9月 5日 石囲い炉と思われる42・43号の平面図作成。46・49・50号の掘り下げ後セクション図作成、その後写真撮影。47号を掘り下げし、完掘写真を撮影。
- 9月 6日 41・48・51号のビットの掘り下げ。4号周辺の完掘写真撮影及び、4号の炉の断ち削りを行う。7号袋状土坑の小ビット内より、完形の深鉢を確認。10号の壁だし。26号の土器エレベーション作成。4・29・38・44・47・48号遺物出土状況写真撮影。
- 9月 7日 平面図・遺物出土状況図の作成。57号～59号、22号・35号の掘り下げ。10・21・54号完掘状況の写真撮影。7・15・24号遺物出土状況写真撮影。6・34号セクション写真撮影後、セクション図作成。
- 9月 8日 48号遺物出土状況写真撮影。42・43号炉セクション写真撮影後セクション図作成。42・43号セクション写真撮影後セクション図作成。53・58・59・60号セクション写真撮影後セクション図作成。
- 9月 9日 42・43号炉完掘。62・63・64・65号セクション写真撮影後セクション図作成。
- 9月10日 58・62号遺物出土状況写真撮影。調査区南側セクション写真撮影後、セクション図作成。52・64・65号を掘り下げし、完掘後写真撮影。遺構平面図作成。
- 9月11日 25・26・46・50・53・63・67・71・72号掘り下げ後完掘写真撮影。71号遺物出土状況写真撮影。

9月12日 遺物平面図作成。清掃後、全景写真撮影。重機による埋め戻し。

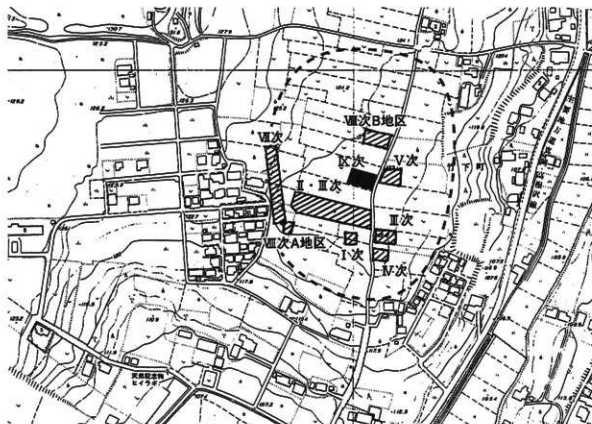
9月13日 重機による埋め戻し。調査終了。

## 2. 遺跡の環境

竹下遺跡の所在する宇都宮市は、栃木県の中央部に位置し、関東平野の最奥部にあたる。本遺跡は、宇都宮市の中心から東方へ約7kmに所在し、同台地上には国指定史跡の飛山城跡が所在する。

遺跡の周辺は、主に畑地として利用されているが、すぐ西側には住宅団地が造成され、宅地化が進んでいる。

本遺跡は、鬼怒川左岸の台地上に立地し、標高は約120～125mを測る。この台地は北から西側にかけて鬼怒川が南流し、東と南側は小河川により開析され谷が形成され、一見独立丘陵の様相を呈する。本遺跡はその南側緩斜面上に営まれた縄文時代の集落跡である。



第1図 調査区位置図

調査次	調査期間	調査面積㎡	調査内容	調査機関
第1次	昭和28年10月9日～12日		縄文時代前期の平地式住居跡1軒	宇都宮大学郷土史研究会
第Ⅱ次	昭和32年10月16日～ 同年12月19日	1,040	縄文時代の竪穴住居跡1軒、土坑217基、小ピット等	宇都宮市教育委員会
第Ⅲ次	平成2年8月1日～10月8日	400	縄文時代中・後期の竪穴住居跡13軒、土坑52基等	〃
第Ⅳ次	平成2年8月6日～8月23日	65	土坑15基、小ピット等	〃
第Ⅴ次	平成5年7月26日～10月15日	200	縄文時代中期の竪穴住居跡2軒、土坑36基、石囲い2基、小ピット等	〃
第Ⅵ次	平成6年1月27日～3月31日	150	縄文時代の竪穴住居跡2軒、土坑40基等	〃
第Ⅶ次	平成14年5月1日～5月30日	500	縄文時代の竪穴住居跡3軒、土坑數十基等	〃
第Ⅷ次	平成17年5月2日～7月31日	734	縄文時代の竪穴住居跡13軒、土坑65基、小ピット等	〃

第1表 調査経過表

第2図は竹下遺跡周辺の縄文時代の遺跡をプロットしたものである。遺跡の分布状況を見ると、鬼怒川左岸の清原台地上に、約2kmおきに縄文時代の遺跡が見られることがわかる。

本遺跡の北方約6.5kmに石神遺跡が所在する。この遺跡は2回の調査が行われ、竪穴住居跡、土坑などが確認されている。第2次調査では、縄文時代中期（阿玉台式）の工房跡と想定される竪穴住居跡（S I - 0 1）が確認されている。この住居跡は長軸7m、短軸6.4mの楕円形で、1回の建替えが行われている。住居内には炉がなく、磨製石斧の原石や未製品、剥片など石器製作に関係する遺物が多く出土している。

本遺跡の北東方約5kmに板戸不動山遺跡が所在する。この遺跡は平成14年度に調査が行われ、縄文時代中期の竪穴住居跡が11軒、土坑多数が確認され、竪穴住居跡が環状にめぐる「環状集落」であることが判明した。竪穴住居跡は直径4～5mの円形のものが主で、中心から少し外れた位置に石囲炉をもつ。土坑は、深いものと浅いものがあり、前者は袋状土坑で、後者は墓穴の可能性がある。特に浅い土坑は広場の中心部に集中する。遺物は、縄文土器（加曾利E式）のほか、石棒、石刀、石皿、磨石、蜂巣石、打製石斧、磨製石斧、石鏃、石錐等が多数出土した。

本遺跡の北東方約2.5kmには刈沼遺跡が所在する。この遺跡は下野考古学研究会と宇都宮市教育委員会により数回にわたる調査が行われ、縄文時代後～晩期にかけての集落跡であることが判明している。竪穴住居跡が13軒、土坑20基、柱穴等が確認された。遺物は、縄文土器のほか、石鏃、石錐、土偶、石剣、耳飾り、土版・石版等が出土している。S I 0 9からは女性をかたどったものと思われる土版が出土している。

本遺跡の南東方約600mに清陵高校地内遺跡が所在する。この遺跡は高校の建設に先立ち調査が行われ、縄文時代早期（井草式期）の竪穴住居跡が1軒確認されている。住居跡の規模は直径約3mの円形のプランで、住居跡内からは、撚糸文系土器（井草I式）、石核、礫器などが出土している。

本遺跡の南方約4.5kmに下西原遺跡が所在する。この遺跡は平成19年度に調査が行われ、縄文時代中期の竪穴住居跡が11軒、土坑80基以上が確認されている。下西原遺跡から東方約1kmに下上遺跡が所在する。この遺跡は平成16年度にとちぎ生涯学習財団埋蔵文化財センターにより調査が行われ、縄文時代中期末葉から後期前葉を中心とする遺跡であることが確認されている。その後道路建設に先立つ調査を宇都宮市教育委員会と実施し、竪穴住居跡、土坑、配石遺構などが見つかり、縄文時代後期（称名寺式～堀之内式）を中心とする大規模な集落跡であることがわかった。

このほかにも鎮守林西遺跡、千波ヶ原遺跡、東田遺跡など数多くの縄文時代の遺跡が所在する。

№	遺跡名	所在地	時代と種別	備考
1	竹下遺跡	宇都宮市竹下町	縄文時代の住居跡	
2	石神遺跡	高敷町東蔵寺	縄文時代の住居跡	
3	板戸不動山遺跡	宇都宮市板戸町	縄文時代の住居跡・古墳時代の古墳	円形2基
4	刈沼遺跡	宇都宮市刈沼町	縄文・古墳時代の住居跡	
5	千波ヶ原遺跡	宇都宮市竹下町	縄文・古墳時代の住居跡	
6	清陵高校地内遺跡	宇都宮市竹下町	縄文時代の住居跡	
7	鶴山東原遺跡	宇都宮市鶴山町	縄文・奈良・平安時代の住居跡	
8	東田遺跡	宇都宮市上懸谷町	縄文時代の住居跡	
9	シドヒ久保遺跡	宇都宮市上懸谷町	縄文・古墳時代の住居跡	
10	圃内遺跡	宇都宮市上懸谷町	縄文・奈良・平安時代の住居跡	
11	下西原遺跡	宇都宮市上懸谷町	縄文・奈良・平安時代の住居跡	
12	下上遺跡	宇都宮市上懸谷町	縄文・奈良・平安時代の住居跡	
13	柳木坂遺跡	宇都宮市上懸谷町	縄文時代の住居跡・古墳時代の古墳	
14	追分原遺跡	宇都宮市下懸町	縄文・古墳時代の住居跡	
15	上野遺跡	宇都宮市上野町	古代の遺跡	

第2表 周辺遺跡一覧表



第2図 周辺道路分布図 (1/5,000)

## II 調査概要

遺構は、竪穴住居跡11軒、土坑47基（第3図）が確認された。以下、それぞれの遺構について記す。尚、発掘調査中は、便宜上遺構番号を通して付けたが、報告にあたっては、竪穴住居跡は番号の前にS Iを冠し、土坑はSKを冠することとする（第5表参照）。また、調査時には同一の遺構と考えていたものが、報告書作成にあたって竪穴住居跡と土坑に区分されたものに関しては、番号の後に竪穴住居跡の場合はA、土坑の場合にはBと付けた。

### I 竪穴住居跡

#### S104（第5・9図）

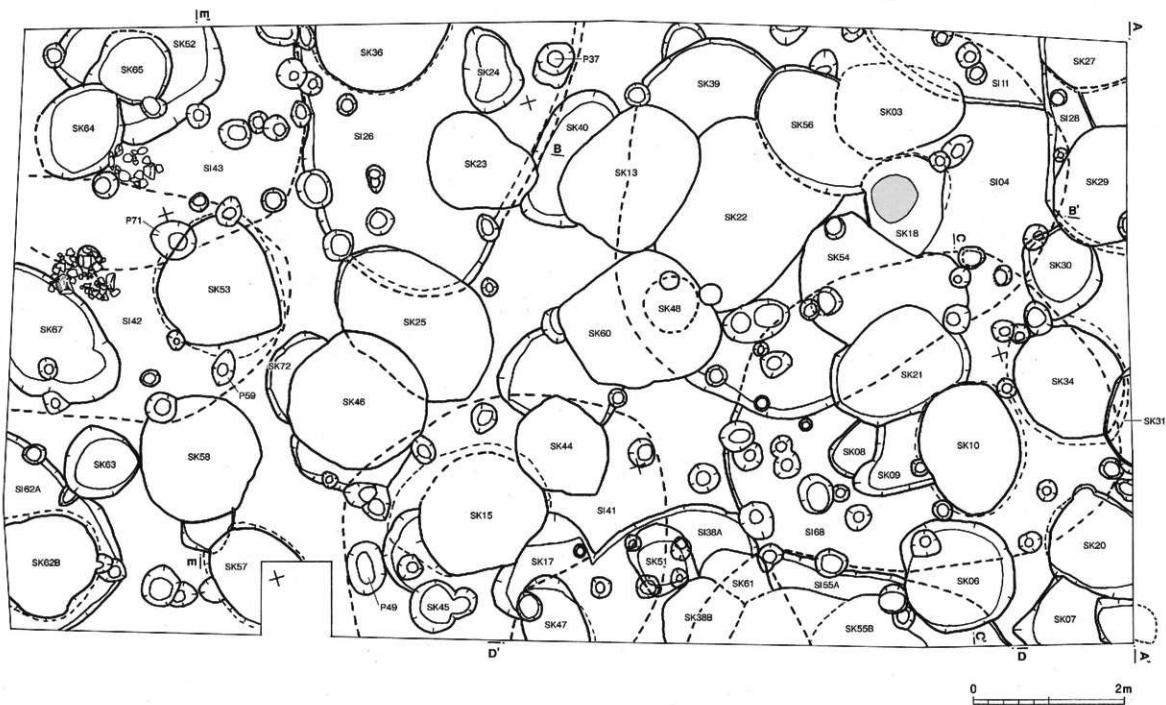
**規模・形状** 南北4.8m×東西6mの楕円形。**床面の状況** 床面は褐色地山。壁 確認面から深さ30cm。**柱穴** 壁際に柱穴と主柱穴と思われる4本の柱が確認できたが、それ以外は見つけることができなかったが、炉を囲むようにあったものと思われる。**炉** 中央から東寄りに地床炉、その規模は長軸63m×短軸60mである。**重複関係** S I 69と切り合い関係。その他SK13・SK18・SK22・SK39・SK48・SK54・SK56を切る。**覆土の状況** 自然堆積。**遺物** 1は深鉢の波状口縁部片である。波頂部に貼付文がつけられている。口縁部は無文で、以下円形刺突文が2列施される。胴部は地文が縄文で、O字状に磨り消される。2は深鉢の波状口縁部片である。波頂部に貼付文がつけられている。口縁部は無文で、以下円形刺突文が2列施される。前者よりもやや小ぶりのものであるが、文様構成は近似する。3は口縁部が内湾する。地文の縄文は沈線により区画され、その他は磨り消される。4は波状口縁部片で、口縁部は無文、胴部はRLの縄文が施される。5は口縁部片で、口縁部は無文、以下円形刺突文が2列施される。6は口縁部片で、LRの縄文が施され、直下に沈線がめぐり、7は隆線起線により無文帯と縄文帯を区分する。8は沈線により縄文帯と無文帯が区画される。

#### S111（第5・10図）

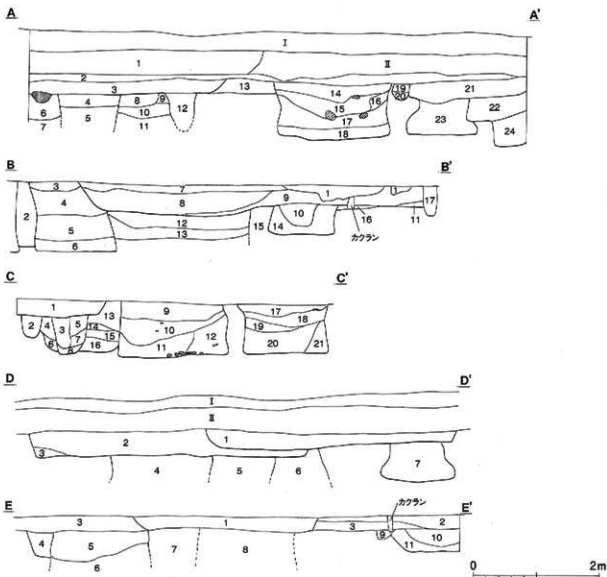
**規模・形状** 南北1m×東西1m・不明。**床面の状況** 床面はローム地山。壁 確認面から深さ10cm。**柱穴** 不明。**炉** 不明。**重複関係** S I 04と切り合い関係。**覆土の状況** 自然堆積。**遺物** 1と4は同一個体である。地文が燃糸文で、口縁部と胴部の境に隆線を貼り付ける。口縁部は2条の沈線を施した隆線を貼付け区画文をつくり、その区画内に縦位の連続刺突文を施す。2は隆線を貼付、その中に沈線を施す。3は4条の沈線が施される。5～7は胴部片である。5は地文が縄文で、沈線により渦巻と刺状モチーフを有する沈線が施される。6は地文が条線文で、2条の沈線により渦巻文が施される。7は沈線により縄文帯と無文帯が区分される。8と9は底部片である。8は底径5cmである。9は底径7.2cmで、沈線により縄文帯と無文帯が区分され、蛇行沈線が垂下する。

#### S126（第6・11図）

**規模・形状** 南北1m×東西3mの楕円形。**床面の状況** 床面はローム地山。壁 約10cmのローム層を掘り込む。**柱穴** 壁柱穴がめぐり、**炉** 不明。**重複関係** S I 23・SK25・SK36を切る。**覆土の状況** 自然堆積。**遺物** 1～4は口縁部片である。1は波状口縁の深鉢形

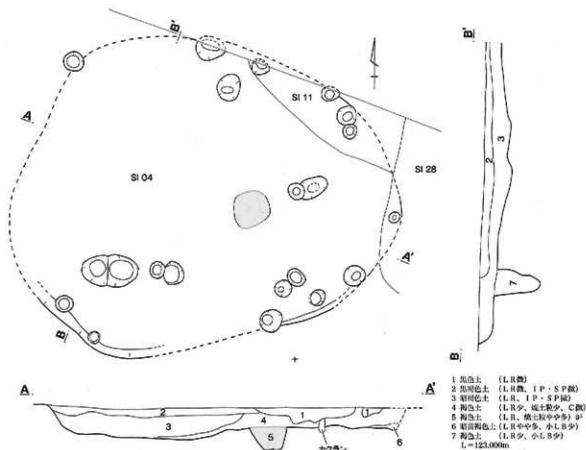


第3图 調査区全体图 (1/50)

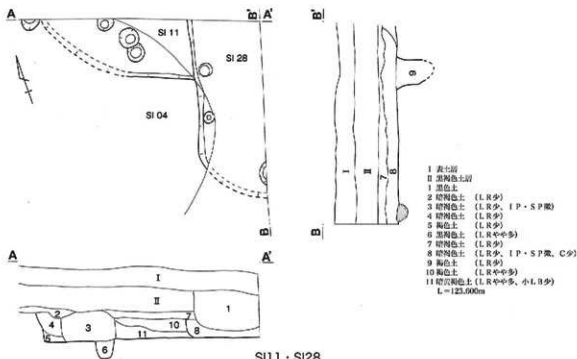


- A-A'** I 表土層  
 II 深層土層  
 1 黒色土 (L.R少, 褐色土小L.B中多)  
 2 深褐色土 (L.R少)  
 3 暗褐色土 (L.R少, I.P・S.P既, C少)  
 4 褐色土 (L.R中多, I.P・S.P少)  
 5 褐色土 (L.R中中多, I.P・S.P少, 礫土, C少)  
 6 褐色土 (L.R中中多, 小L.B少)  
 7 褐色土 (L.R中中多, L.B中中多)  
 8 暗褐色土 (L.R中中多, 小L.B少)  
 9 暗褐色土 (L.R中中多, L.B中中多)  
 10 暗褐色土 (L.R中中多, 小L.B中多)  
 11 暗褐色土 (L.R中中多, I.P・S.P既)  
 12 暗褐色土 (L.R中中多, L.B中中多)  
 13 暗褐色土 (L.R中中多, L.B中中多)  
 14 暗褐色土 (L.R中中多, I.P・S.P既)  
 15 暗褐色土 (L.R中中多, 小L.B少)  
 16 暗褐色土 (L.R中中多, 小L.B少)  
 17 暗褐色土 (L.R中中多, I.P・S.P少)  
 18 暗褐色土 (L.R中中多, L.n中中多)  
 19 暗褐色土 (L.R中中多, 小L.B少)  
 20 暗褐色土 (L.R中中多)  
 21 暗褐色土 (L.R中中多)  
 22 暗褐色土 (L.R中中多)  
 23 暗褐色土 (L.R中中多)  
 24 暗褐色土 (L.R中中多, L.B中中多)  
 L=123,600m
- B-B'** 1 黒色土 (L.R既)  
 2 褐色土 (L.R少, S.P・礫土既・C既)  
 3 暗褐色土 (L.R少, S.P既)  
 4 暗褐色土 (L.R中中多, I.P・S.P少)  
 5 褐色土 (L.R中中多, 小L.B少, I.P既)  
 6 暗褐色土 (L.R中中多, L.B中中多)  
 7 深褐色土 (L.R既, I.P・S.P既)  
 8 暗褐色土 (L.R・I.P・S.P既)  
 9 褐色土 (L.R少, 礫土既, C既)  
 10 褐色土 (L.R・礫土既中中多)  
 11 暗褐色土 (L.R中中多, 小L.B少)  
 12 暗褐色土 (L.R中中多, L.B中中多, 礫土既, C少)  
 13 褐色土 (L.R中中多, 礫土既, C少)  
 14 褐色土 (L.R中中多)  
 15 暗褐色土 (L.R中中多, L.B中中多)  
 16 暗褐色土 (L.R中中多, 小L.B少)  
 17 暗褐色土 (L.R中中多)  
 L=123,000m
- C-C'** 1 暗褐色土 (L.R少, 礫土既) 4均類土  
 2 暗褐色土 (L.R少)  
 3 暗褐色土 (L.R中中多, I.P既)  
 4 暗褐色土 (L.R中中多, 小L.B少)  
 5 暗褐色土 (L.R中中多)  
 6 暗褐色土 (L.R中中多)  
 7 暗褐色土 (L.R中中多, 小L.B少)  
 8 暗褐色土 (L.R既, かたつきまる)  
 9 暗褐色土 (L.R既, I.P既)  
 10 暗褐色土 (L.R少, I.P・S.P既)  
 11 褐色土 (L.R中中多, 小L.B少)  
 12 暗褐色土 (L.R少, I.P・S.P既)  
 13 暗褐色土 (L.R中中多, 小L.B少)  
 14 褐色土 (L.R中中多, 小L.B既)  
 15 暗褐色土 (L.R中中多, L.B少)  
 16 暗褐色土 (L.R中中多)  
 17 暗褐色土 (L.R既)  
 18 暗褐色土 (L.R中中多, 小L.B少)  
 19 褐色土 (L.R中中多, L.B少)  
 20 暗褐色土 (L.R中中多, 大L.B中中多) 天井面崩落  
 21 暗褐色土 (L.R中中多, 小L.B少)  
 L=123,000m
- D-D'** I 表土層  
 II 深層土層  
 1 褐色土 (L.R少, S.P既)  
 2 褐色土 (L.R中中多, I.P・S.P既)  
 3 暗褐色土 (L.R中中多, 小L.B中中多)  
 4 暗褐色土 (L.R中中多, 小L.B中中多, C少)  
 5 褐色土 (L.R中中多, L.B中中多, 礫土既, C既)  
 6 褐色土 (L.R中中多, L.B少, I.P・S.P既)  
 7 褐色土 (L.R中中多, 小L.B少, 礫土既, C少)  
 L=123,600m
- E-E'** 1 暗褐色土 (L.R少, I.P・S.P少)  
 2 暗褐色土 (L.R既)  
 3 褐色土 (L.R少, I.P・S.P既)  
 4 暗褐色土 (L.R中中多, 小L.B既, I.P・S.P既)  
 5 暗褐色土 (L.R中中多, I.P・S.P少, 礫土既, C少)  
 6 暗褐色土 (L.R中中多, L.B少, 小L.B中中多, 礫土既中中多)  
 7 暗褐色土 (L.R少, I.P少, S.P中中多)  
 8 褐色土 (L.R中中多)  
 9 暗褐色土 (L.R中中多)  
 10 暗褐色土 (L.R中中多, 小L.B既, I.P・S.P少)  
 11 褐色土 (L.R中中多, L.B少, S.P既)  
 L=123,000m

第4図 土層断面図



SI04

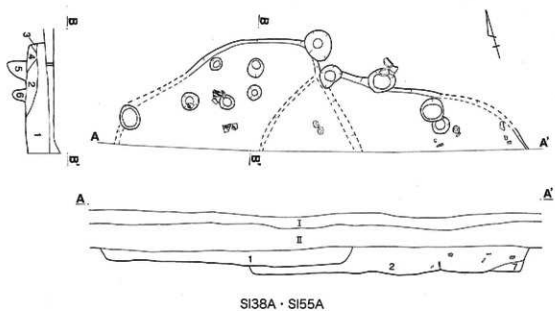
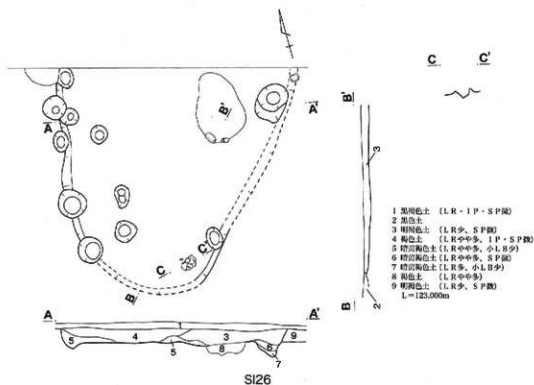


SI11・SI28

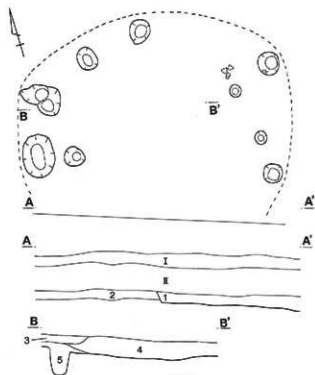
0 2m

第5図 SI04・SI11・SI28 平断面図



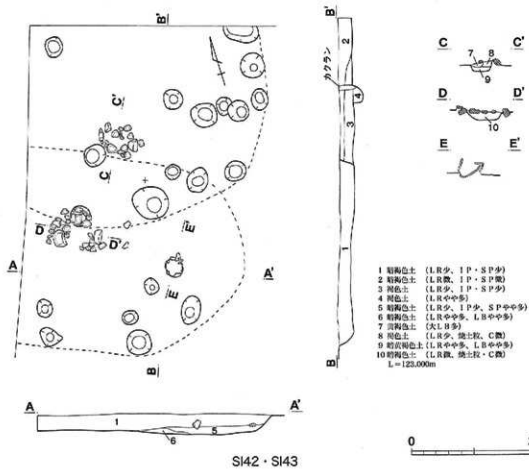


第6圖 SI26 · SI38A · SI55A 平面圖



- I 表土層  
 II 褐色土層  
 1 褐色土 (L,R少, S,P無)  
 2 褐色土 (L,R中多)  
 3 褐色土 (L,R無)  
 4 褐色土 (L,R少)  
 5 褐色土 (L,R中多)  
 L=123.500m

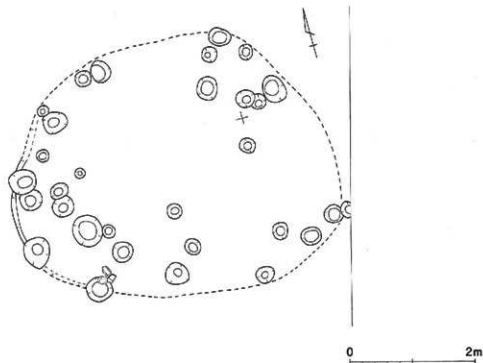
SI41



- 1 褐色土 (L,R少, I,P,S,P少)  
 2 褐色土 (L,R無, I,P,S,P無)  
 3 褐色土 (L,R少, I,P,S,P少)  
 4 褐色土 (L,R中多)  
 5 褐色土 (L,R少, I,P少, S,P中多)  
 6 褐色土 (L,R中多, L,B中多)  
 7 褐色土 (大L,H多)  
 8 褐色土 (L,R少, 塊土粒, C無)  
 9 褐色土 (L,R中多, L,B中多)  
 10 褐色土 (L,R無, 塊土粒, C無)  
 L=123.000m

SI42・SI43

第7図 SI41・SI42・SI43 平面図



第8図 SI69 平面図

土器で、波頂部に「8」字状の隆帯が貼付される。2は地文が縄文で、隆沈線により円形に区画される。3は波状口縁で円形列点文が施される。4は微隆起線により口縁部無文帯と胴部縄文帯を区分する。5～11は胴部片である。5は横位のRL縄文を施す。6～10は微隆起線により縄文帯と無文帯を区分する。11は胴部中位を横位の沈線により無文帯と縄文帯を区分し、下段に「J」字文と思われる無文帯が施される。12・13は底部片である。底径は12が7cmで、13が10cmである。

#### SI28 (第5図)

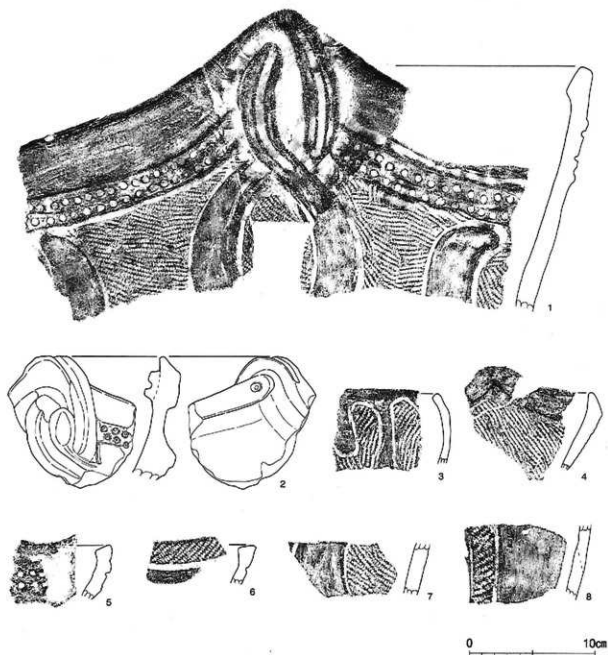
**規模・形状** 南北 — m×東西 — m。**床面の状況** 床面はローム地山。壁 確認面から深さ32cm。**柱穴** 壁柱穴と思われるピットが2本確認できた。**炉** 不明。**重複関係** SI111、SK27、SK29を切る。SI104に切られる。**遺物** 実測可能な遺物は無。

#### SI38A (第6・11図)

**規模・形状** 南北 — m×東西 — m。**床面の状況** 床面はローム地山。壁 約27cmのローム層を掘り込む。**柱穴** 壁柱穴が巡る。**炉** 不明。**重複関係** SI55A・SK38Bを切る。**覆土の状況** 自然堆積。**遺物** 1～7は口縁部片である。1は微隆起線文により口縁部無文帯と胴部縄文帯が区分される。口縁部は双頭突起をもつ。2と3は微隆起線文により口縁部無文帯と胴部縄文帯が区分される。4は突帯により口縁部無文帯と胴部縄文帯を区分する。5は口縁部に2条の隆帯を貼付、胴部は燃糸文が施される。6は2条の沈線により区画された中に縄文が施される。7は沈線と縄文が施される。8と9は胴部片である。微隆起線文により無文帯と縄文帯が区分される。10～12は底部片である。10は底径が6cmで、底面に網代痕が残る。11は底径が8cmで、12は底径が7.6cmである。

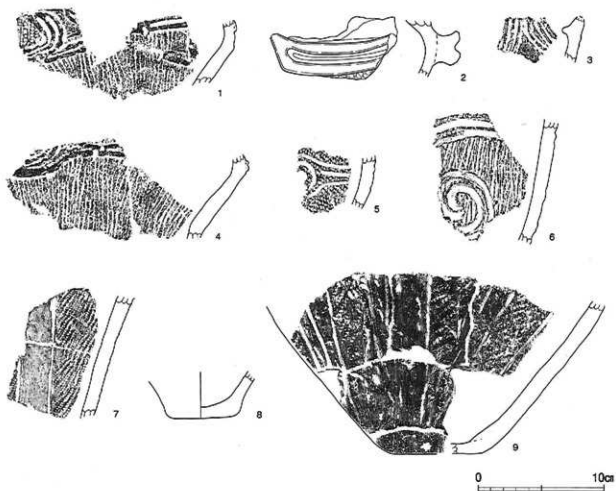
#### SI41 (第7・12図)

**規模・形状** 直径4mの円形。**床面の状況** 床面は褐色地山。壁 不明。**柱穴** 壁柱穴が円形



第9図 SI04出土遺物実測図

に巡る。炉 不明。重複関係 SK15・SK17・SK44・SK45・SK51を切る。覆土の状況 自然堆積。遺物 1はコップ形の深鉢である。口径10cm、器高12cm、底径5.8cmの小形品である。口縁部には刺突のある2条の隆帯と8の字状の貼付文が施される。胴部上半は2条の沈線に区画された中に縄文が施される。底部は網代痕。色調は黒褐色。2は口縁部に2条の沈線がめぐり、その上下に刻みが施される。また、4単位の小突起が上下2段につけられる。口径は12.8cm。色調は褐色。3は2条の沈線に区画された中に円形刺突文が2列に施される。胴部は縦位にRLの縄文が施される。胎土に金雲母を含み、色調は暗褐色。4は波状口縁で、口縁部に1列の刺突文、胴部にRLの縄文が施される。色調は淡褐色で、内面に煤が付着する。5は波状口縁で、円形刺突文が2列に施される。沈線により区画された内側に縄文が施される。色調は淡褐色。

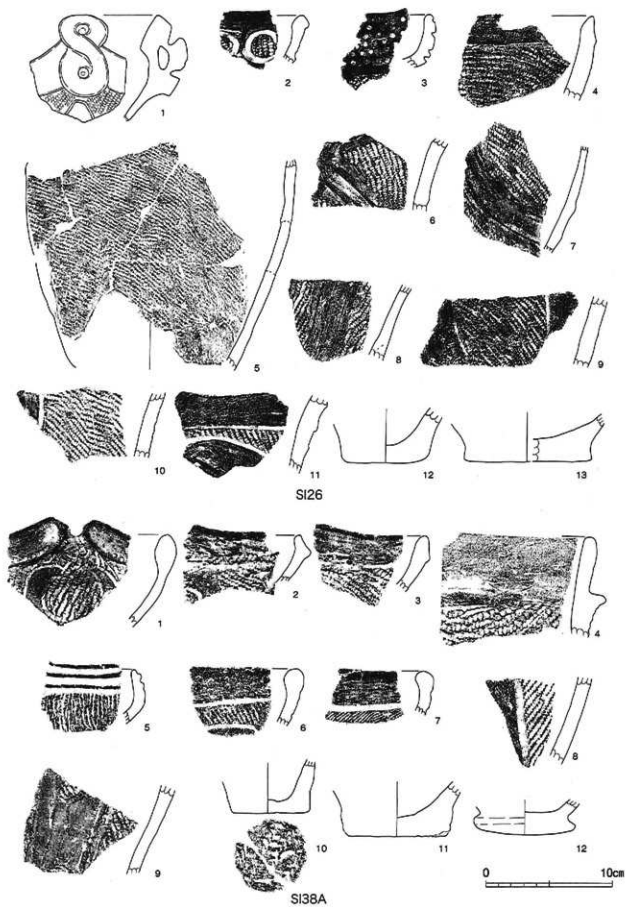


第10図 S111出土遺物実測図

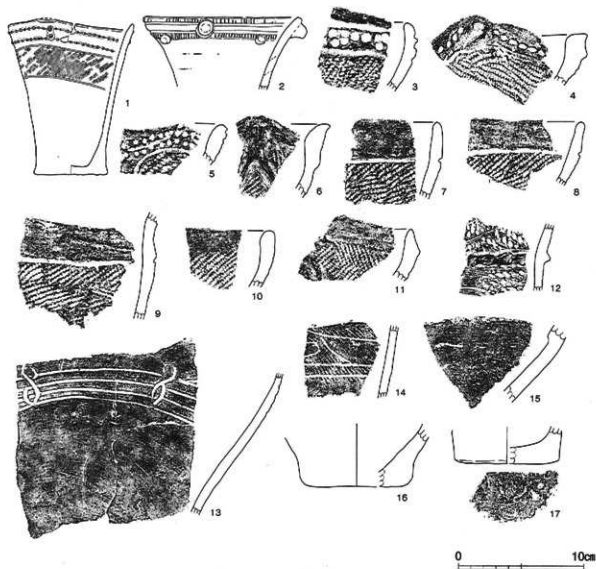
6は波状口縁で、沈線により区画された内側に縄文が施される。色調は褐色。7～9は横位の沈線により、口縁部無文帯と胴部縄文帯に区分される。何れも色調は暗褐色。10は波状口縁で、胴部にLRの縄文が施される。色調は赤褐色。11は波状口縁で、微隆起線により口縁部と胴部を区分する。胴部にRLの縄文が施される。色調は淡褐色。12は指頭による押捺をされた隆帯が横位にめぐり、地文に縄文と沈線が施される。色調は黒褐色。13は横位に4条の沈線と8の字状の沈線が施される。色調は暗褐色。14は沈線により区画された磨消縄文により幾何文が施される。色調は暗褐色。15は浅鉢で、色調は赤褐色。16・17は底部片である。それぞれの底径は、16が8.4cm、17が8.2cmである。

**S142 (第7・13図)**

**規模・形状** 直径3.8mの円形。床面の状況 床面は褐色地山。壁 不明。柱穴 壁柱穴が円形に巡る。炉 石囲炉。重複関係 SI43・SK53・SK67を切る。覆土の状況 自然堆積。  
**遺物** 1は口縁部と胴部の一部が欠損している。残存高33cm、底径は6.8cm。口縁部は無文で、胴部はLRの縄文が施される。色調は暗褐色。2と3は波状口縁で、口縁部無文帯、胴部に縄文が施される。色調は暗褐色。4は地文にLRの縄文が施され、隆帯が貼付される。色調は淡褐色。5～7は同一個体で、微隆起線により地文の縄文と区画される。色調は



第11圖 SI26・SI38A出土遺物実測圖



第12図 SI41出土遺物実測図

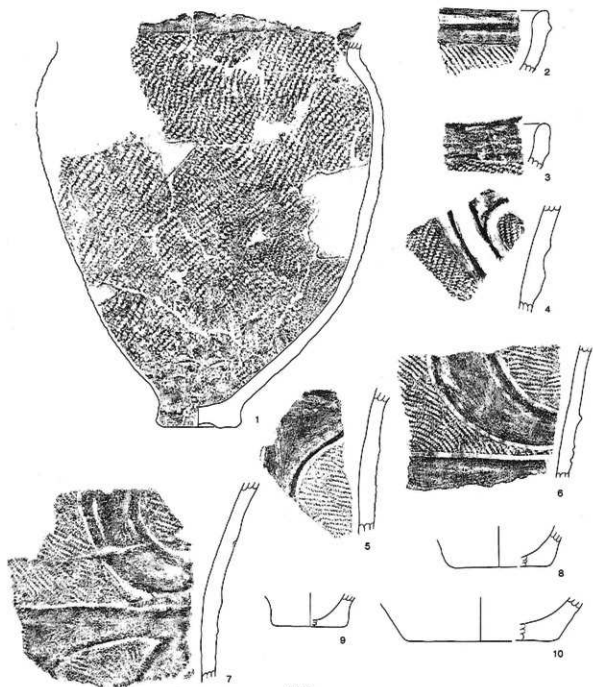
淡褐色。8～10は底部片である。それぞれの底径は、8が8cm、9が6cm、10が12cmである。

#### SI43 (第7・14図)

**規模・形状** 直径3.2mの円形。床面の状況 床面は褐色地山。壁 不明。柱穴 壁柱穴が円形に巡る。炉 石囲炉。重複関係 SI42に切られ、SK52・SK64・SK65を切る。覆土の状況 自然堆積。遺物 1は口縁部が緩く内湾する。口縁部に沿って微隆起線を施し、幅の狭い口縁部無文帯をつくる。胴部はRLの縄文が施される。色調は淡褐色。2と3は同一個体。胴部に垂直方向の条線が施され、口縁部と胴部の境に横位、胴部に縦位の押捺された隆帯が貼付される。色調は暗褐色。4は突起をもち、微隆起線により口縁部無文帯と胴部縄文帯を区分する。5は磨消縄文で、色調は暗褐色。6は沈線により縄文帯と無文帯を区画している。胎土に金雲母を含む。色調は暗褐色。7と8は底部片である。それぞれの底径は、7が6.4cm、8が7cmである。

#### SI55A (第6・14図)

**規模・形状** 不明。床面の状況 床面はローム地山。壁 高44cmの壁が一部確認できた。柱穴 壁柱穴。炉 不明。重複関係 SI38Aに切られ、SK55Bを切る。覆土の状況 自然堆積。



SI42

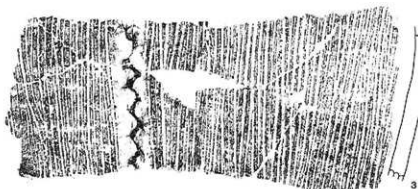
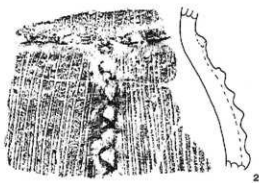
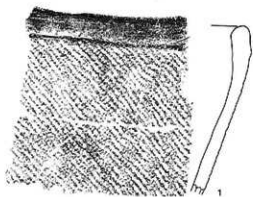


SI62A

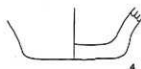
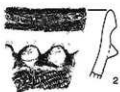
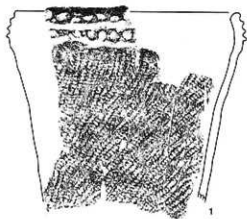


第13圖 SI42・SI62A出土遺物実測図





SI43



SI55A

0 10cm

第14圖 SI43・SI55A出土遺物実測圖

**遺物** 1は口径が18cmである。口縁部は2条の隆線と凹形刺突文が施される。胴部は縦位のRL縄文が施される。2は1条の押捺された隆帯が施される。3はRL縄文が施される。4は底部片で、底径が7.8cmである。

#### SI62A (第3・13図)

**規模・形状** 不明。**床面の状況** 床面はローム地山。壁 高16cmの壁が一部確認できた。**柱穴** 壁柱穴が3本確認できた。**炉** 不明。**重複関係** SI62B、SK63を切る。**覆土の状況** 自然堆積。**遺物** 1～3は口縁部片である。1と2は微隆起線により、口縁部無文帯と胴部縄文帯を区分する。3は沈線により口縁部無文帯と胴部縄文帯を区分する。

#### SI69 (第3図)

**規模・形状** 南北約4m×東西約5.2mの楕円形。**床面の状況** 床面はローム地山。壁 浅い壁が西側で一部確認できた。**柱穴** 壁柱穴と思われるピットが確認できた。**炉** 不明。**重複関係** SI04、SI55A、SK06、SK08～SK10、SK21、SK34、SK54を切る。**遺物** 実測可能な遺物は無。

## 2 土坑

### SK03 (第3・17図)

**規模・形状** 南北1.35m×東西1.7mの楕円形。**重複関係** SI04、SI11、SK56と切り合う。**壁・底面** 建物基礎の掘削深度を超えるため底面までの掘り下げを行わなかった。壁はほぼ垂直。**覆土の状況** 自然堆積。**遺物** 1～6は口縁部片である。1は沈線による渦巻文が施されている。2は地文に縄文が施され、隆沈線による渦巻文が施される。3と4は地文に縄文が施され、隆沈線が施される。5は沈線が施される。6は内湾する口縁で、RLの縄文が施される。7は沈線によるクランク文により区画された中に縄文が施される。8は交互刺突文をめぐらし、以下縦位の沈線が施される。9は隆帯上に爪形文、その下に角甲文が施される。10～12は胴部片で、条線文が施される。13と14は胴部片で、地文が縄文で、縦位の沈線が施される。15と16は胴部片で縦位の沈線で区画し、LRの縄文が充填される。18は底部片で、底径が6cmである。

### SK06 (第15・17図)

**規模・形状** 南北1.45m×東西1.45mの円形。**重複関係** SI55A、SI70に切られる。**壁・底面** 断面形は袋状を呈し、確認面からの深さは65cm、底面はローム地山。**覆土の状況** 自然堆積。**遺物** 1～5は口縁部片である。1は口縁部と胴部を沈線で区画し、胴部に横位のLR縄文が施される。2は横位の隆沈線を施し、胴部は横位のRLの縄文が施される。3は縦位のRL縄文が施される。4は沈線による区画文内を横位のRL縄文が充填される。5は口縁部に円形の刺突文がめぐり、胴部にRL縄文が施される。6は地文のRLの縄文が施され、沈線により方形に区画された内側を磨り消す。7は地文に縦位のRL縄文を施し、2条の沈線が垂下する。8は地文に縦位のRL縄文を施し、沈線を伴う隆帯が2本めぐり。

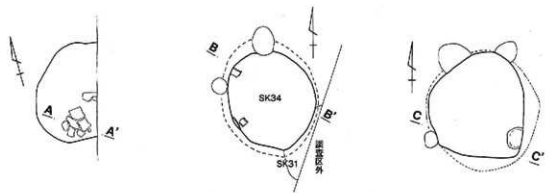
### SK07 (第15・18・19図)

**規模・形状** 南北 — m×東西 — m。**重複関係** SK20と切り合う。**壁・底面** 壁はややオーバーハングし、底面に小ピットをもつ。その中から1の土器が完形の状態で出土した。底面はローム地山。**覆土の状況** 自然堆積。**遺物** 1は口径42.5cm、器高が52.6cm、底径が11.4cmのキャリバー形を呈する深鉢形土器である。口縁部は、隆帯と沈線による渦巻文と方形の区画文が施される。区画文内には横位のRL縄文が施される。口唇部に円盤状の把手が1カ所水平に付される。把手の上面には沈線による渦巻文が施される。胴部は縦位にRLの縄文を施し、3条の沈線と蛇行沈線が垂下する。2～4は口縁部片である。2は口唇部に交互刺突文が施され、その下に横位と縦位の沈線が施される。3は沈線が施される。4は口縁部に横位の沈線が施され、以下横位のRLの縄文が施される。5～13は胴部片である。5は地文に縦位のRL縄文を施し、2条の沈線が垂下する。6と7は地文に縦位のLR縄文を施し、2条の沈線が垂下する。8と9は縦位の鋸歯状沈線が施される。10は地文に条線が施され、その後2条の沈線が施される。11と12は沈線により区画された中に縄文が施される。13は沈線により円形に区画された中に縦位の沈線が施される。14は底部片で、底径が5.6cmである。

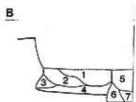
### SK08 (第3図)

**規模・形状** 南北—m×東西—mの不整形。**重複関係** SK09に切られる。**壁・底面** 確認面からの深さは25cmの浅目の土坑で、底面はローム地山。**覆土の状況** 自然堆積。**遺物** 実測可





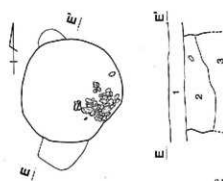
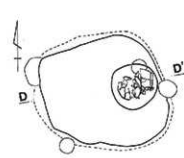
SK29



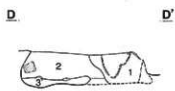
SK34



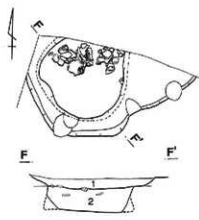
SK53



SK58



SK48 · SK60



SK62B

- SK34
- 1 暗褐色土 (LR少, SP少)
  - 2 暗褐色土 (LR中少, SP少)
  - 3 暗褐色土 (LR混, 小LB混)
  - 4 暗褐色土 (LR多)
  - 5 褐色土 (LR中少, SP混)
  - 6 暗褐色土 (LR多, 小LB混)
  - 7 暗褐色土 (LR多)
- L=123.000m

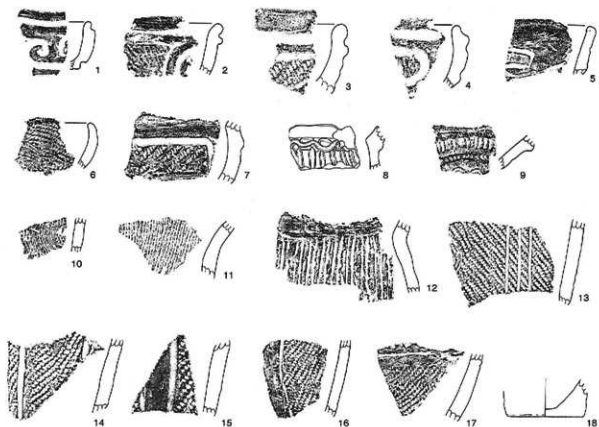
- SK48 · SK60
- 1 暗褐色土 (LR少, SP混)
  - 2 暗褐色土 (LR少, SP少, IP混)
  - 3 暗褐色土 (LR少, IP混)
  - 4
- L=123.000m

- SK58
- 1 暗褐色土 (LR少, IP · SP少)
  - 2 暗褐色土 (LR少, IP · SP少, 粘土混, C少)
  - 3 暗褐色土 (LR中少, LB少, 小LB中少, 粘土混中少)
- L=123.000m

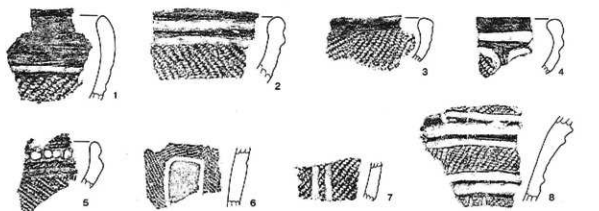
- SK62B
- 1 暗褐色土 (LR少, IP混)
  - 2 暗褐色土 (LR少, LB少, IP · SP混, C混)
- L=123.000m



第16圖 SK29 · SK34 · SK53 · SK48 · SK60 · SK58平断面圖



SK03



SK06

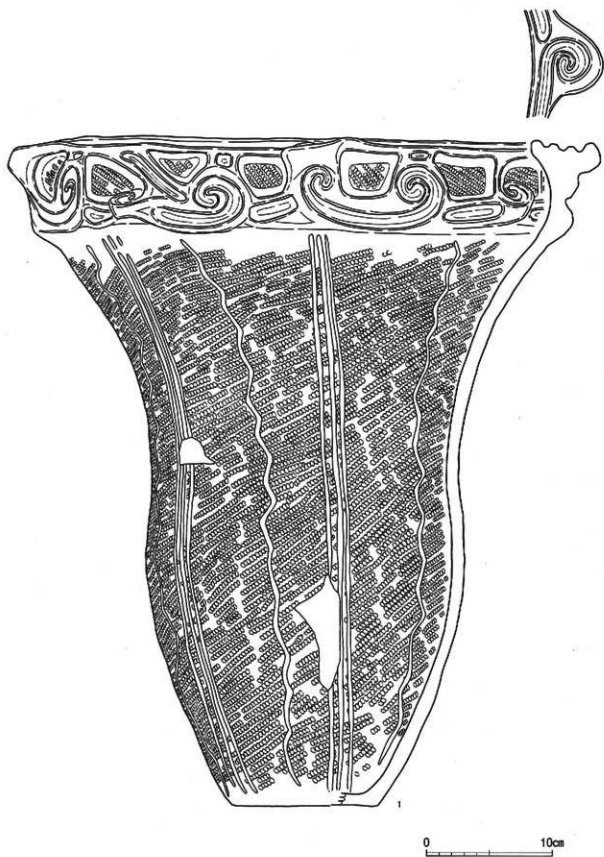


第17図 SK03・SK06出土遺物実測図

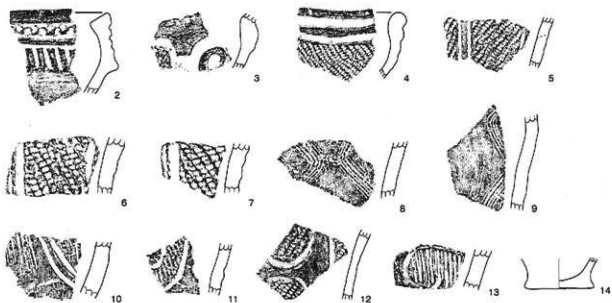
能な遺物は無。

**SK09 (第3・20図)**

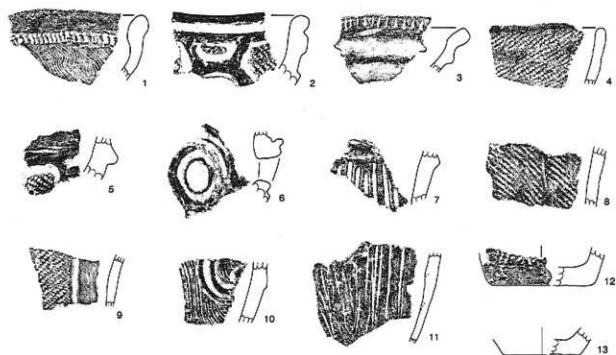
**規模・形状** 南北一m×東西一mの不整形。 **重複関係** SK10・SK21に切られる。壁・底面 確認面からの深さは35cmの浅目の土坑で、底面はローム地山。覆土の状況 自然堆積。遺物 1～7は口縁部片で、1は横位の爪形文と縦位の鋸歯状沈線が施される。2は地文に横位のRL縄文を施し、さらに沈線による楕円形の区画文が施される。3は口唇部に刻目をつけ、直下に隆帯がめぐる。4は横位のLR縄文が施される。5は地文に横位のRL縄文を施し、さらに隆



第18图 SK07出土遺物実測図(1)



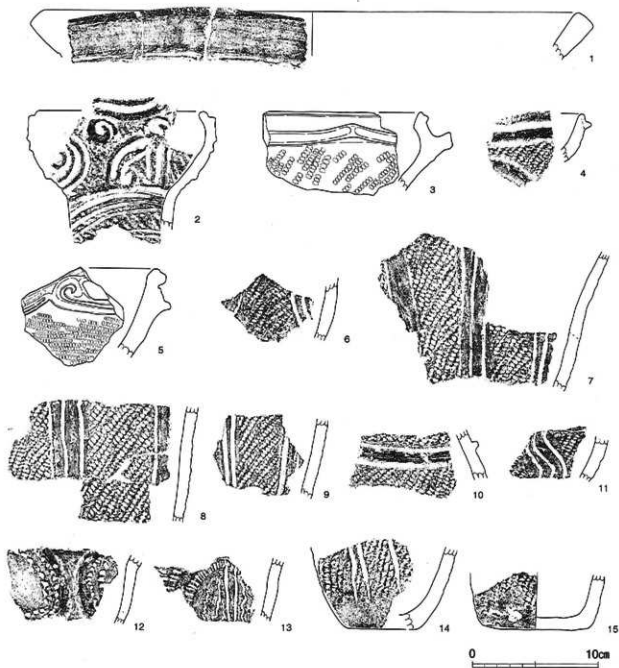
第19図 SK07出土遺物実測図(2)



第20図 SK09出土遺物実測図

帯と沈線により区画される。6は把手部分で円孔が穿たれている。7は縦位の沈線文が施され、その上に隆帯がめぐる。8～11は胴部片で、8は横位のRL縄文が施され、9は沈線で区画し、縦位のRL縄文が充填される。11は地文に条線文が施される。10は地文に条線文で、その上に渦巻文が貼付される。12と13は底部片で、12の底径は8cm、13の底径は6cmである。

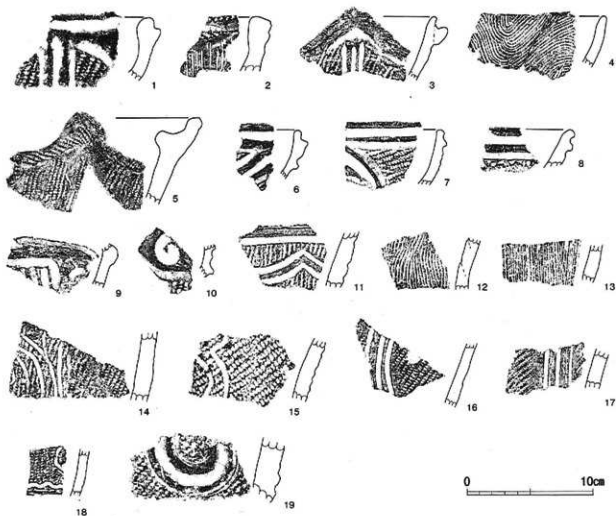




第21図 SK10出土遺物実測図

SK10 (第15・21図)

**規模・形状** 南北1.8m×東西1.3mの楕円形。重複関係 SK10、SK21と切り合う。壁・底面 壁はほぼ垂直で、確認面からの深さは90cm、底面はローム地山。覆土の状況 自然堆積。  
**遺物** 1～5は口縁部片である。1は浅鉢形土器である。2は口径14.6cmの内湾する口縁部で、地文が縄文で、沈線と隆帯により幾何学文様が施される。3は内湾する口縁で、隆帯を貼付、胴部は横位のLR縄文が施される。4は口唇部に隆帯をめぐらし、その下に縦位のRL縄文が施される。5は口縁部に沈線による渦巻文、胴部に縦位のLR縄文が施される。6～13は胴部片である。6は地文が縦位のRL縄文で、3条の沈線が施される。7～9は縦位のRL縄文が施され、3条の沈

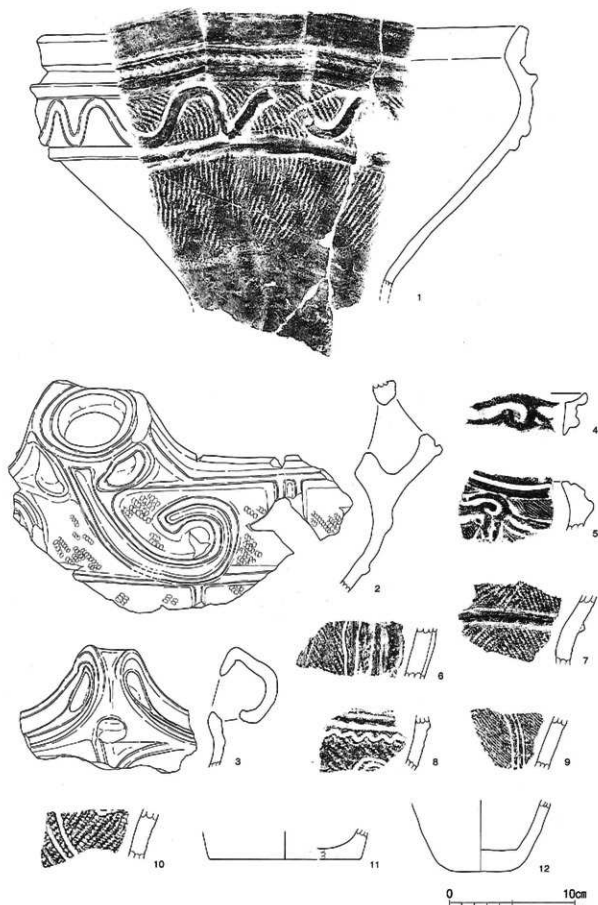


第22図 SK13出土遺物実測図

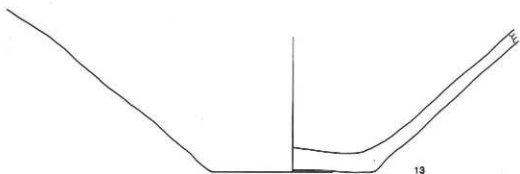
線が垂下する。10は地文が縦位のRL縄文で、横位に隆帯がめぐる。11は地文が縦位のRL縄文で、3条の蛇行沈線が施される。12は2条の角押文が円形に施される。13は楕円形に刻目を施し、その内側に縦位の沈線が施される。14~15は底部片である。14は底径6cmで、地文が縦位のRL縄文で1条もしくは2条の沈線が垂下する。15は、底径9cmで、地文が縦位のRL縄文である。

### SK13 (第3・22図)

**規模・形状** 南北1.7m×東西1.6mの円形。 **重複関係** SK22・SK40を切る。 **壁・底面** 壁はややオーバーハングし、確認面からの深さは115cm、底面はローム地山。 **覆土の状況** 自然堆積。 **遺物** 1~11は口縁部片である。1は隆帯と沈線により区画文がつくれ、区画内には横位のLR縄文が施される。2は口唇部に刻目をもち、その下に縦位の沈線が施される。3は波状口縁で、口唇部に隆帯がめぐり、胴部の地文にはLRの縄文を施し、3条の沈線が垂下する。4は波状口縁で、地文に条線が施される。5は波状口縁で、口唇部に横位のRL縄文、胴部に縦位のRL縄文を施す。6は隆帯と沈線により区画文がつくれる。7は隆帯と沈線により区画文がつくれ、区画内には縦位のRL縄文が施される。8は沈線が2条めぐる。9は沈線により区画文がつくれ、区画内には縦位の沈線が施される。10は沈線による渦巻文が施される。11は地文に縄文を施し、沈線により横線と連弧文が施される。12~20は胴部片である。12と13は条線文が施



第23图 SK15出土遺物実測図(1)



第24図 SK15出土遺物実測図 (2)



SK16



SK17

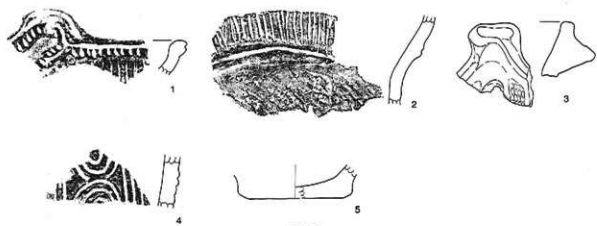


SK18

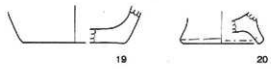
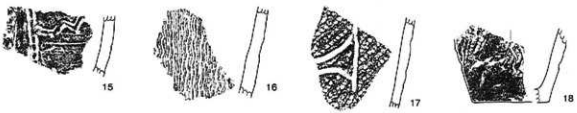
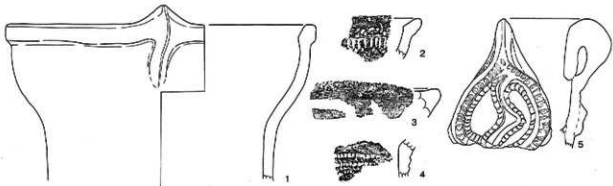


SK20

第25図 SK16~18・20出土遺物実測図



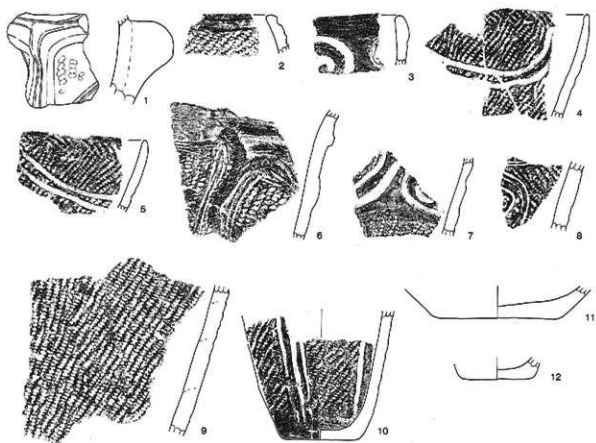
SK21



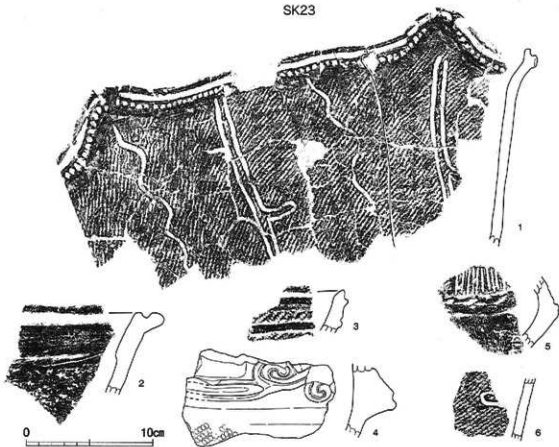
SK22



第26图 SK21・SK22出土遺物実測図

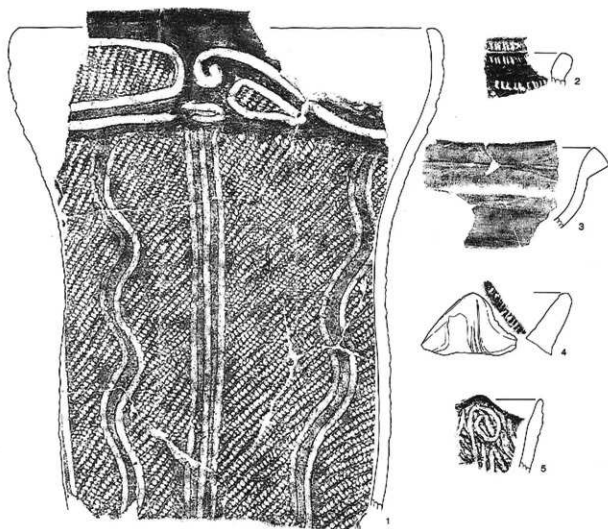


SK23



SK24

第27图 SK23·SK24出土遺物実測圖

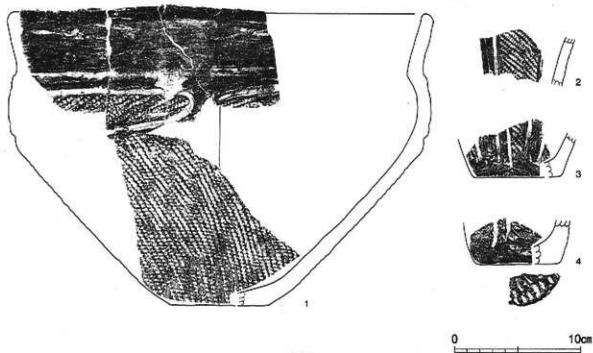
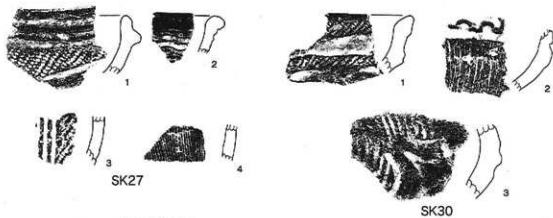
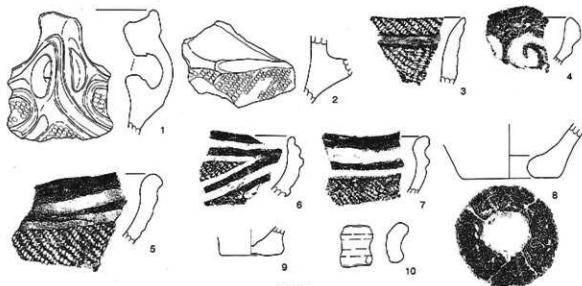


第28図 SK29出土遺物実測図

される。14と18は地文に横位のRL縄文を施し、沈線が施される。15は地文に縦位のRL縄文を施し、2条の蛇行沈線が垂下する。16は地文に縦位のRL縄文を施し、3条の沈線が施される。17は地文に縦位のRL縄文を施し、3条の沈線が垂下する。18は地文に縄文を施し、沈線が施される。19は地文に縦位のRL縄文を施し、隆帯が貼付される。

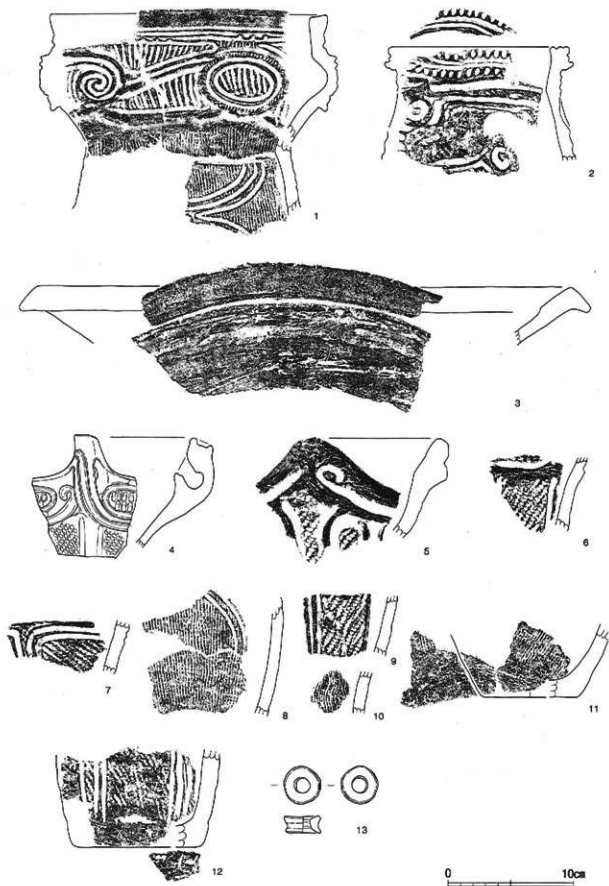
#### SK15 (第15・23・24図)

**規模・形状** 南北1.7m×東西1.7mの円形。重複関係 S I 4 1 に切られる。壁・底面 壁はオーバーハングし袋状を呈する。確認面からの深さは125cm、底面はローム地山。覆土の状況 自然堆積。  
**遺物** 1は浅鉢形土器で、口縁部は無文帯で、胴部上半に2条の隆帯を直線にめぐらし、その間に隆帯を波状に貼りつける。地文は縦位にRL縄文が施される。2～9は口縁部片である。2は口縁部に中空の把手を有する。口縁部文縁帯には隆帯により渦巻文が施される。地文には横位のRL縄文が施される。3は口縁部に中空の把手を有する。4は沈線により渦巻文が施される。5は口唇部に沈線がめぐり、口縁部に隆帯と沈線による渦巻文、地文には横位のRL縄文が施される。6は地文が縄文で、2条の隆帯と1条の沈線が縦位に垂下する。7は地文が縄文で1条の隆帯が

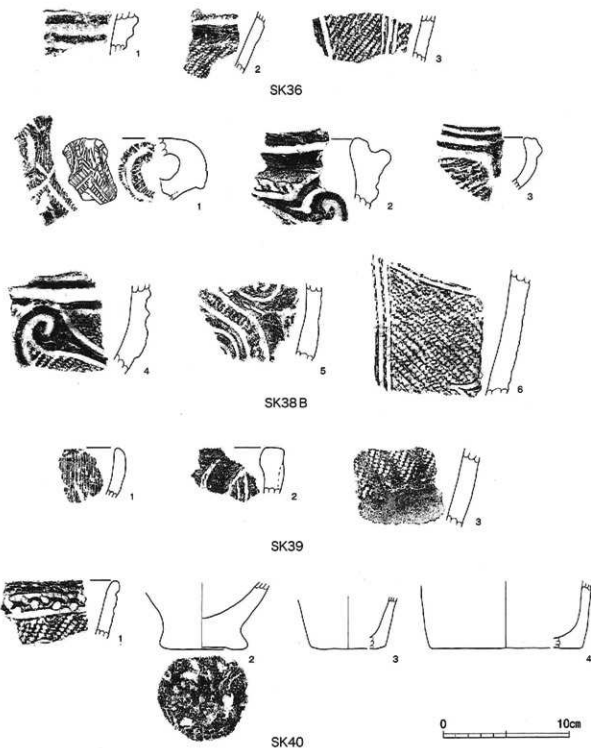


第29圖 SK25・SK27・SK30・SK31出土遺物実測圖



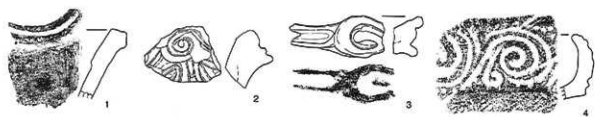


第30图 SK34出土遺物実測図



第31図 SK36・SK38B・SK39・SK40出土遺物実測図

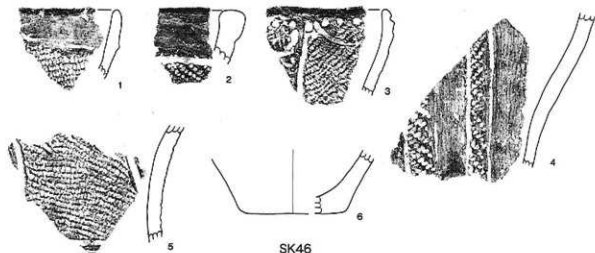
横位にめぐる。8は地文が横位のRL縄文で、横位の隆帯の直下に押引文と波状文が施される。9は地文が燃糸文で3条の沈線による渦巻文が施される。10は地文が縦位のRL縄文で、3条の沈線による渦巻文が施される。11~13は底部片である。11は底径が12cmで、12は5cmである。13は底径が13cmである。



SK44



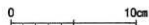
SK45



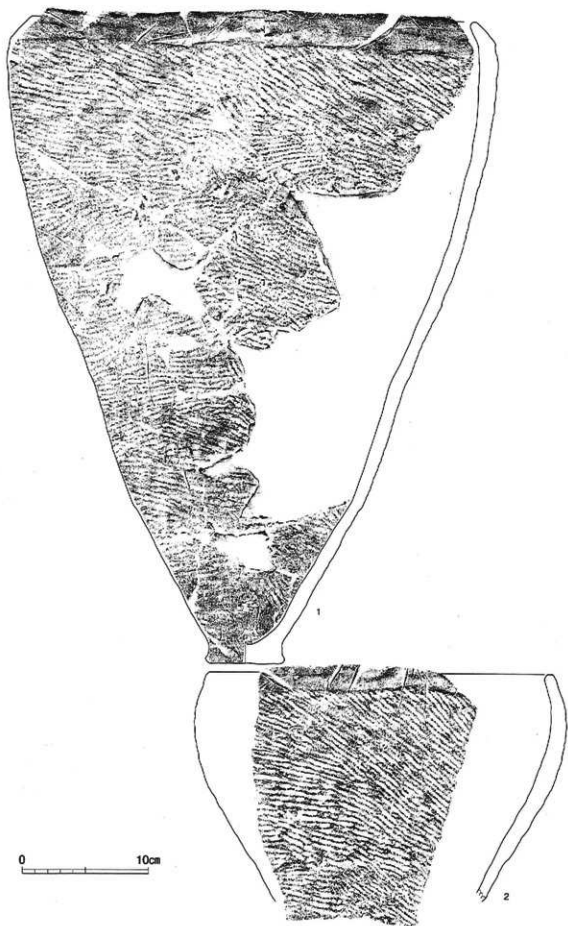
SK46



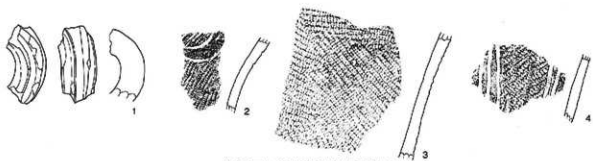
SK47



第32圖 SK44~47出土遺物実測圖



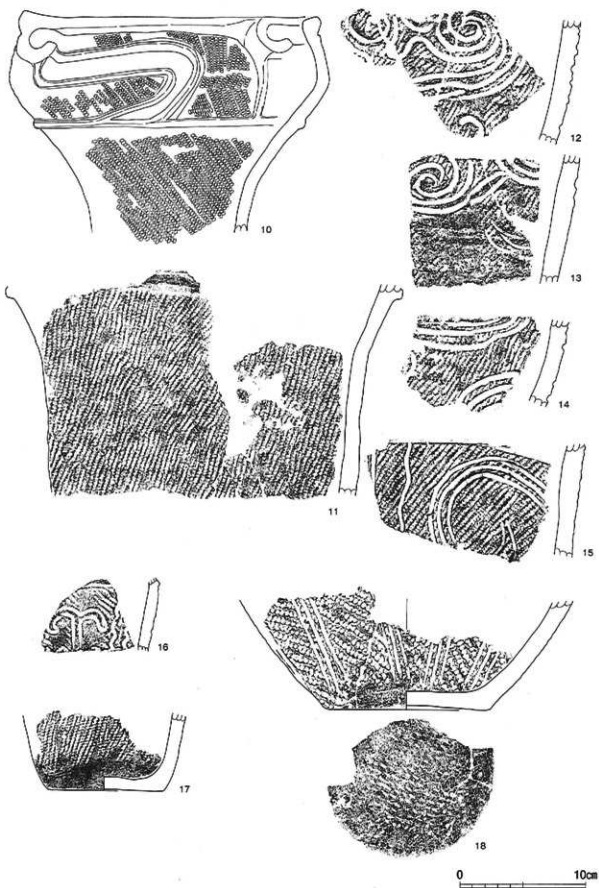
第33圖 SK48出土遺物実測圖



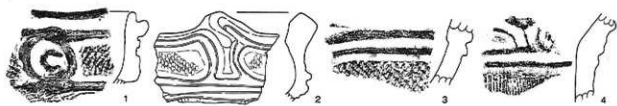
第34图 SK52出土遺物実測図



第35图 SK53出土遺物実測図 (1)



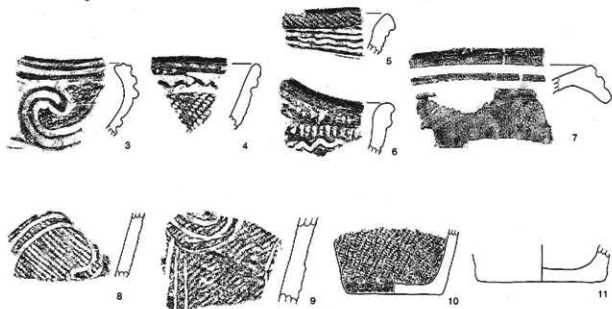
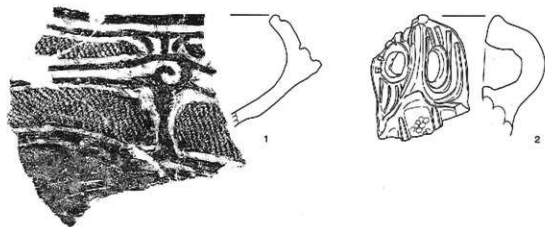
第36圖 SK53出土遺物実測圖 (2)



SK54



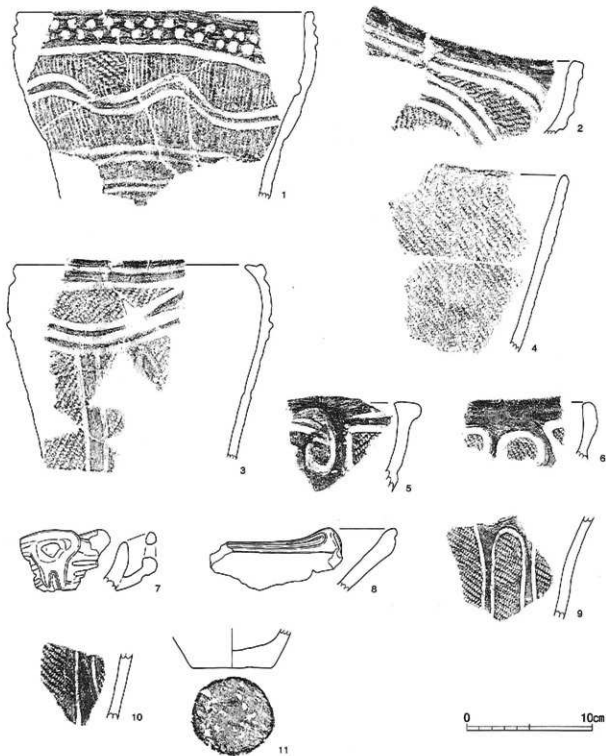
SK57



SK58



第37圖 SK54・SK57・SK58出土遺物実測圖

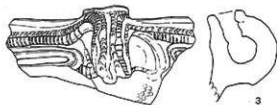
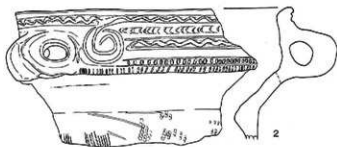
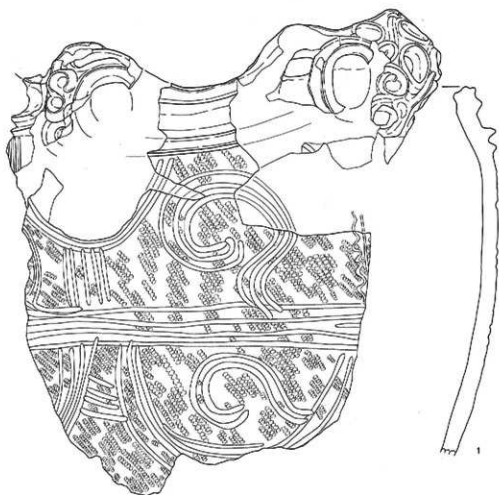


第38図 SK60出土遺物実測図

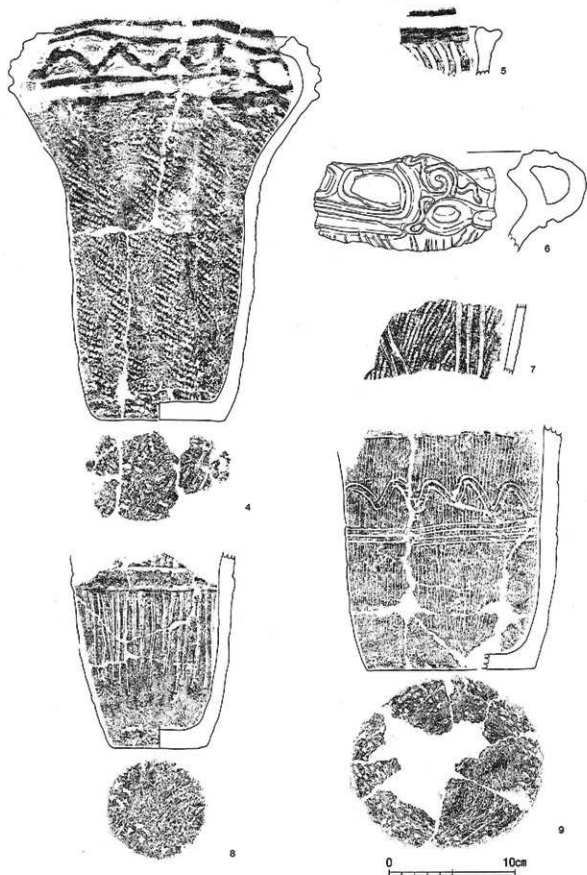
SK16 (第3・25図)

規模・形状 南北1.55m×東西1.2mの楕円形。重複関係 SK44、SK60と切り合う。壁・底面 壁はほぼ垂直で、確認面からの深さは34cm、底面はローム地山。覆土の状況 自然堆積。遺物 1～3は胴部片である。1は隆帯と沈線が施される。2は地文に縦位のLR縄文を施し、2

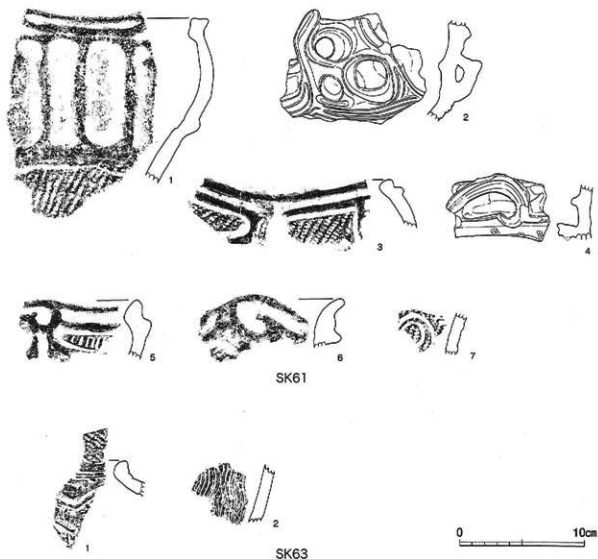




第39図 SK62B出土遺物実測図(1)



第40圖 SK62B出土遺物実測圖(2)



第41図 SK61・SK63出土遺物実測図

条の沈線と蛇形沈線が垂下する。3は地文に横位のRL縄文を施し、沈線により渦巻と刺状モチーフの文様が施される。

SK17 (第3・25図)

**規模・形状** 南北1m×東西1.5mの楕円形。 **重複関係** SK15、SK47、SI41と切り合う。 **壁・底面** 断面逆台形を呈し、確認面からの深さは40cm、底面はローム地山。 **覆土の状況** 自然堆積。 **遺物** 1と2は口縁部片である。1は沈線により区画された中に縦位のRL縄文が施される。2は口縁部無文帯で、胴部は横位のRL縄文が施される。3～5は胴部片である。3と5は地文に縦位のRL縄文を施し、2条の沈線が施される。4は磨り消し縄文である。

SK18 (第3・25図)

**規模・形状** 南北0.6m×東西1.0mの楕円形。 **重複関係** SI01を切る。 **壁・底面** 壁はほぼ垂直で、確認面からの深さは80cm、底面はローム地山。 **覆土の状況** 自然堆積。 **遺物** 1は口唇部に横位のRL縄文が施される。2と3は胴部片である。2は縦位にLR縄文を施し、2条の

沈線が垂下する。3は縦位にRL縄文を施し、2条の沈線が垂下する。

#### SK20 (第3・25図)

**規模・形状** 南北1.3m×東西1.3mの円形。**重複関係** SK07と切り合う。**壁・底面** 壁はオーバーハングし、袋状を呈する。確認面からの深さは75cm、底面はローム地山。**覆土の状況** 自然堆積。**遺物** 1～3は口縁部片である。1は沈線と隆帯により渦巻文が施され、区画内に縦位のRL縄文が施される。2は口唇部に沈線が施される。4～6は胴部片である。4は地文が条線で、2条もしくは3条の沈線が施される。5は地文が縦位のRL縄文で、2本の沈線と蛇行沈線が垂下する。6は地文が縦位のLR縄文で、2条の沈線が垂下する。

#### SK21 (第3・26図)

**規模・形状** 南北1m×東西1.9mの楕円形。**重複関係** SK10と切り合う。**壁・底面** 壁はほぼ垂直で、確認面からの深さは80cm、底面はローム地山。**覆土の状況** 自然堆積。**遺物** 1～3は口縁部片である。1は波状口縁で、口唇部の隆帯部分に刻目を施し、その下に縦位の沈線が施される。2は口縁部に縦位の沈線が施される。なお、1と2は同一個体である。3は把手を有する。4は胴部片で、沈線により直線文と渦巻文が施される。5は底部片で、底径が9cmである。

#### SK22 (第3・26図)

**規模・形状** 南北2.6m×東西1.9mの隅丸長方形。**重複関係** 南西隅をカクランにより切られる。**壁・底面** 壁はほぼ垂直で、確認面からの深さは80cm、底面はローム地山。**覆土の状況** 自然堆積。**遺物** 1～11は口縁部片である。1は口縁部に鱗状突起を付す。2は口縁部に刻目を施す。3は口縁部に沈線を施す。4は平行する角押文を施す。5は口縁部の把手部分で、刻目と結節沈線文が施される。6は2段の交互刺突文と刻目が施される。7は平行する沈線と刻目が施される。8は沈線による区画文が施される。9は波状口縁である。10は地文が縄文で、横位の2条の沈線が施される。11は押し引きによる角押文が3条施される。12～17は胴部片である。12は隆帯の刻目が施される。13は地文が横位のRL縄文で、横位の蛇行沈線が施される。14は地文が縄文で、隆帯が貼付される。15は結節沈線文と半截竹管による蛇行沈線が施される。16は条線文。17は地文が縦位のRL縄文で、沈線が施される。18～20は底部片である。18は底径6.1cm、19は底径6cm、20は底径8cmである。20は脚部片である。

#### SK23 (第3・27図)

**規模・形状** 南北1.25m×東西1.5mの楕円形。**重複関係** S126に切られ、SK40を切る。**壁・底面** 断面逆台形で、確認面からの深さは115cm、底面はローム地山。**覆土の状況** 自然堆積。**遺物** 1～5は口縁部片である。1は隆帯により区画をし、その中に縦位のRL縄文を施す。2は横位のLR縄文を施す。3は沈線による渦巻文を施す。4と5は、地文が縦位のRL縄文で、2条の沈線を施す。6～9は胴部片である。6は隆帯により区画され、その内側に縦位のRL縄文を施す。7は沈線による文様が施される。8は地文が縦位のLR縄文で、2条の沈線が施される。9は縦位のRL縄文を施す。10～12は底部片である。10は底径6cmで、地文が縦位のRL縄文で、3条の沈線が垂下する。11は底径が10cm、12は底径が5.6cmである。

#### SK24 (第3・27図)

**規模・形状** 南北1.2m×東西0.7mの楕円形。**重複関係** S126に切られる。**壁・底面** 壁はほぼ垂直で、確認面からの深さは50cm、底面はローム地山。**覆土の状況** 自然堆積。**遺物** 実測

可能な遺物は6点。1は波状口縁で、口縁部に沈線と円形刺突文がめぐる。胴部は地文が縦位のRL縄文で、蛇行沈線と沈線が垂下する。2～6は口縁部片である。2は口唇部に沈線がめぐる。3は地文が横位のLR縄文で、横位の沈線と隆帯が施される。4は隆帯による渦巻文が施される。5は縦位の沈線が施され、隆帯により胴部と区画され、胴部は縄文が施される。6は地文が縦位のRL縄文で、沈線が施される。

#### SK25 (第15・29図)

**規模・形状** 南北1.5m×東西2.5mの楕円形。重複関係 SK46・SI26に切られる。壁・底面 壁はオーバーハングし、袋状を呈する。確認面からの深さは105cm、底面はローム地山。覆土の状況 自然堆積。遺物 1～7は口縁部片である。1は中空把手が付された口縁部で、隆帯により楕円形に区画された中に横位のLR縄文が施される。2は口縁部と胴部を隆帯により区画し、胴部に横位のLR縄文が施される。3は無文帯を挟んで縄文が施される。4は沈線による渦巻文。5は口縁部が無文帯で、胴部に横位のRL縄文が施される。6は隆帯により区画された中に横位のRL縄文が施される。7は口縁部に2条の沈線がめぐり、胴部は縄文が施される。8と9は底部片である。8は底径が13cmで、焼成後の穿孔がされている。9は底径が5cmである。10は把手片と考えられる。

#### SK27 (第3・29図)

**規模・形状** 南北1m×東西1m。重複関係 SI28に切られる。壁・底面 確認面からの深さは92cm、底面はローム地山。覆土の状況 自然堆積。遺物 1と2は口縁部片である。1は隆帯により区画された中に横位のLR縄文が施される。2は沈線が施される。3と4は胴部片である。3は地文が縦位のRL縄文で、3条の沈線が垂下する。4は条線文。

#### SK29 (第16・29図)

**規模・形状** 南北1.5m×東西1mの楕円形。重複関係 SK30・SI28と切り合う。壁・底面 壁はオーバーハングし、袋状を呈する。確認面からの深さは75cm、底面はローム地山。覆土の状況 自然堆積。遺物 1は口縁部に沈線により渦巻文と楕円区画文が施され、区画文内に横位のLR縄文が施される。胴部は地文が縦位のRL縄文で、3条の沈線と蛇行沈線が垂下する。2は刻目が2条施される。3は浅鉢形土器である。4は波状口縁で、口唇部に刻目を施す。5は波状口縁で、地文が縄文で、沈線が施される。

#### SK30 (第3・29図)

**規模・形状** 南北1.2m×東西1.0mの楕円形。重複関係 SK29・SI04に切られる。壁・底面 確認面からの深さは84cm、底面はローム地山。覆土の状況 自然堆積。遺物 1～3は口縁部片である。1は横位のLR縄文後、横位の太めの沈線が施される。2は口縁部が交互刺突文で、胴部に条線文が施される。3は隆帯を貼付、区画内に縦位の沈線が施される。

#### SK31 (第3・29図)

**規模・形状** 南北1.4m×東西2.5mの楕円形。重複関係 SI31Aと切り合う。壁・底面 壁はオーバーハングし、袋状を呈する。確認面からの深さは80cm、底面はローム地山。覆土の状況 自然堆積。遺物 1は口径33.8cm、器高23.2cm、底径8cmの浅鉢形土器である。口縁部は無文で、胴部上半に沈線による楕円形の区画文が施され、区画内に横位のLR縄文が施される。下半は縦位のLR縄文が施される。2は胴部片で、地文が縦位のLR縄文で、2条の沈線が垂下する。3

と4は底部片で、3は底径7cmで、4は底径が6.5cmである。4は底面に網代痕が残る。

#### SK32 (第3図)

**規模・形状** 南北1m×東西0.8m。**重複関係** S I 0 4・S I 1 1と切り合う。**壁・底面** 確認面からの深さは70cm、底面はローム地山。**覆土の状況** 自然堆積。**遺物** 実測可能な遺物は無い。

#### SK34 (第16・30図)

**規模・形状** 南北1.45m×東西1.5mの円形。**重複関係** S K 3 1と切り合う。**壁・底面** 壁はオーバーハングし、袋状を呈する。確認面からの深さは85cm、底面はローム地山。**覆土の状況** 自然堆積。**遺物** 1は口径が22cmである。最上段に横位の沈線文と交互刺突文がめぐり、隆帯と沈線により渦巻文と楕円形文を作り、区画内に縦位の沈線を充填する。胴部は地文が縄文で3条の沈線が施される。2は口縁端部に2条の沈線と刻目が施され、口縁部にも2条の沈線が施される。以下沈線により渦巻文等が描かれる。3は浅鉢形土器で、口径が42.5cmである。4は把手が付された口縁部で、隆帯により楕円形に区画された中に刺突文が施される。胴部は地文が横位のLR縄文で、2条の沈線が垂下する。5は波状口縁で、口縁部は沈線による渦巻文が施される。胴部は地文が縦位のRL縄文を施し、さらに隆帯が貼付される。6は地文が横位のLR縄文で、2条の沈線が垂下する。7は地文が縦位のLR縄文で、2条の沈線によりクランク文が施される。8は地文が縄文で、2条の沈線が施される。9は地文が縦位のRL縄文で、3条の沈線が垂下する。10は縦位の鋸歯状沈線が施される。11は底径7.5cmの底部片である。地文が撫糸文である。12は底径10cmの底部片である。地文が縦位のLR縄文で、3条の沈線が垂下する。13は直径3cmの耳輪である。

#### SK36 (第3・31図)

**規模・形状** 南北1m×東西1.8m。**重複関係** S I 2 6に切られる。**壁・底面** 壁はオーバーハングし、袋状を呈する。確認面からの深さは32cm、底面はローム地山。**覆土の状況** 自然堆積。**遺物** 1は隆帯が貼付される。胎土に砂粒、金雲母を含む。2は横位の沈線と縦位のRL縄文が施される。3は地文が縦位のRL縄文で、3条の沈線が垂下する。

#### SK38B (第3・31図)

**規模・形状** 南北1m×東西1m。**重複関係** S I 3 8 Aに切られる。**壁・底面** 壁はオーバーハングし、袋状を呈する。確認面からの深さは80cm、底面はローム地山。**覆土の状況** 自然堆積。**遺物** 1～4は口縁部片である。1は円形の把手部分で、隆帯上に刻目が施される。2は口縁端部に沈線がめぐり、口縁部は隆帯による渦巻文が施される。3は口縁端部に沈線がめぐり、口縁部は沈線による区画文、その中に縄文が施される。4は2条の横位の隆帯と、沈線による渦巻文が施される。5と6は胴部片である。5は沈線による渦巻文、隆帯には刻目が施される。6は地文が横位のRL縄文で、3条の沈線が施される。

#### SK39 (第3・31図)

**規模・形状** 南北1m×東西1.75mの楕円形。**重複関係** S K 1 3・S K 2 2・S K 5 6に切られる。**壁・底面** 壁はオーバーハングし、袋状を呈する。確認面からの深さは100cm、底面はローム地山。**覆土の状況** 自然堆積。**遺物** 1と2は口縁部片である。1は条線文、2は隆帯により区画文をつくり、その中に刺突文が施される。3は胴部片で縦位のRL縄文を磨り消す。胎土に砂粒、金雲母を含む。

#### SK40 (第3・31図)

**規模・形状** 南北1.2m×東西1mの楕円形。**重複関係** SK13・SK23・SK66に切られる。**壁・底面** 壁はオーバーハングし、袋状を呈する。確認面からの深さは100cm、底面はローム地山。**覆土の状況** 自然堆積。**遺物** 1は口縁部片で、2条の沈線の後に交互刺突文が施される。胴部は横位のLRの縄文が施される。2～4は底部片である。2は底径が7cm、3は底径が6cm、4は底径が12cmである。

#### SK44 (第3・32図)

**規模・形状** 南北1.2m×東西1.2mの円形。**重複関係** SI41に切られる。**壁・底面** 壁はオーバーハングし、袋状を呈する。確認面からの深さは65cm、底面はローム地山。**覆土の状況** 自然堆積。**遺物** 1～4は口縁部片である。1は隆帯による円形の把手を有する。胎土に砂粒、金雲母を含む。2と3は沈線により渦巻文が施される。4は口縁端部に円形の刺突文を施す。また、口縁部には沈線により渦巻文が施され、胴部は縦位のLR縄文が施される。5～8は胴部片である。5は横位のRL縄文を施す。6は地文が横位のRL縄文で、横位の隆帯がめぐる。尚、5と6は同一個体である。7は地文が縦位のRL縄文で3条の沈線が施される。8は縦位のLR縄文が施される。

#### SK45 (第3・32図)

**規模・形状** 南北0.65m×東西0.65mの円形。**重複関係** SI41に切られる。**壁・底面** 断面は逆台形を呈する。確認面からの深さは25cm、底面はローム地山。**覆土の状況** 自然堆積。**遺物** 1は波状口縁をもつ浅鉢形土器で、胎土に砂粒、金雲母を含む。2は胴部片で、地文が縄文で、3条の沈線による渦巻文が施される。

#### SK46 (第15・32図)

**規模・形状** 南北1.9m×東西1.9mの円形。**重複関係** SK25を切る。**壁・底面** 断面逆台形を呈する。確認面からの深さは90cm、底面はローム地山。**覆土の状況** 自然堆積。**遺物** 1～3は口縁部片である。1は微隆起線文により口縁部無文帯と胴部縄文帯が区分される。2は沈線により口縁部無文帯と胴部縄文帯が区分される。3は口縁部に円形刺突文がめぐり、沈線による区画文が施される。胴部は地文が縦位のRL縄文で、沈線が垂下する。4と5は胴部片で、沈線により縄文帯と無文帯を区分し、磨り消される。6は底部片で、底径が8.2cmである。

#### SK47 (第3・32図)

**規模・形状** 南北1m×東西0.75mの楕円形。**重複関係** SK17と切り合う。**壁・底面** 壁はオーバーハングし、袋状を呈する。確認面からの深さは90cm、底面はローム地山。**覆土の状況** 自然堆積。**遺物** 1は胴部片で、地文が縦位のRL縄文で、2条の沈線により無文帯と縄文帯が区分され、以下蛇行沈線と「U」字状の沈線が施される。

#### SK48 (第16・33図)

**規模・形状** 南北0.5m×東西0.5mの円形。**重複関係** SK60を切り、SI04に切られる。**壁・底面** 断面逆台形を呈する。確認面からの深さは60cm、底面はローム地山。**覆土の状況** 自然堆積。**遺物** 1は口径35.2cm、器高50cm、底径6cmの深鉢形土器である。微隆起線文により口縁部無文帯と胴部縄文帯が区分される。2は口径27.8cmの深鉢形土器である。微隆起線文により口縁部無文帯と胴部縄文帯が区分される。1は出土状況から正立した状態で埋められ、その上に

2がのりような状態で出土した。

#### SK51 (第3図)

**規模・形状** 南北0.9m×東西0.75mの隅丸方形。**重複関係** S I 3 8 Aと切り合う。**壁・底面** 断面逆台形を呈する。確認面からの深さは75cm、底面はローム地山。**覆土の状況** 自然堆積。**遺物** 実測可能な遺物は無。

#### SK52 (第3・34図)

**規模・形状** 南北1.9m×東西1.8mの隅丸方形。**重複関係** S K 6 4・S K 6 5・S I 4 3と切り合う。**壁・底面** 断面逆台形を呈する。確認面からの深さは60cm、底面はローム地山。**覆土の状況** 自然堆積。**遺物** 1は把手部分である。2～4は胴部片である。2は地文が縄文で、2条の沈線が施される。3はR Lの縄文が施される。4は地文が縦位のR L縄文で、3条の沈線が垂下する。

#### SK53 (第16・35・36図)

**規模・形状** 南北1.5m×東西2.5mの楕円形。**重複関係** S I 4 2・S I 4 3に切られる。**壁・底面** 壁はオーバーハンクし、袋状を呈する。確認面からの深さは104cm、底面はローム地山。**覆土の状況** 自然堆積。**遺物** 1は口径46.4cmで、口縁部と胴部の境に沈線がめぐり、内外面が赤彩される。2は波状口縁で、口径が27cmである。口縁部は地文が横位のR L縄文で、その上に隆帯により渦巻文やクランク文が施される。胴部と口縁部の境に隆帯をめぐらし、胴部は縦位のR L縄文を施す。3は隆帯により渦巻文と区画文がつくれ、区画内を縦位の沈線が施される。胴部は地文に縦位の沈線が施され、2条の隆線が垂下する。4は断面三角形の突帯が貼り付けられ、その下に弧線状の沈線が施される。5は地文が縦位のR L縄文で、横位の隆帯が貼り付けられる。6は地文が縞系文で、隆線と沈線による区画文が施される。7は地文が縦位のR L縄文で、横位に3条の沈線が施される。8は地文が縦位のR L縄文で、隆線が施される。9は縦位の沈線で区画し、横位のR L縄文が充填される。10は口径24cmで、口縁部に隆帯によりクランク文などの区画文、区画文内に横位のR L縄文が施される。胴部に横位のR L縄文が施される。11は口縁部と胴部を隆帯により区分し、胴部は縦位のR L縄文が施される。12～14は同一個体で、地文が縦位のR L縄文で、3条の渦巻文が施される。15は地文が縦位のR L縄文で、3条の渦巻文と蛇行沈線が施される。16は地文が横位にR L縄文を施し、蛇行沈線等が施される。胎土に砂粒、金雲母を含む。17と18は底部片である。17は底径が9.2cmで、縄文が施される。18は底径が13cmで、地文が横位のR L縄文を施し3条の沈線が垂下する。底面には網代痕が残る。

#### SK54 (第3・37図)

**規模・形状** 南北1.5m×東西2.4mの楕円形。**重複関係** S K 1 8・S K 2 1・S I 0 4と切り合う。**壁・底面** 壁はオーバーハンクし、袋状を呈する。確認面からの深さは70cm、底面はローム地山。**覆土の状況** 自然堆積。**遺物** 1と2は隆帯と沈線により区画文が作られ、区画内に縄文が施される。3は横位の沈線が2条めぐり、以下に横位のR L縄文が施される。4は隆帯により区画文が作られ、胴部は条線が施される。

#### SK55B (第3図)

**規模・形状** 南北1m×東西1.5m。**重複関係** S I 5 5 Aに切られる。**壁・底面** 壁はオーバーハンクし、袋状を呈する。確認面からの深さは77cm、底面はローム地山。**覆土の状況** 自然堆積。



遺物 実測可能な出土遺物は無い。

#### SK57 (第3・37図)

規模・形状 南北1.6m×東西1.5mの楕円形。重複関係 ビットと切り合う。壁・底面 断面逆台形を呈する。確認面からの深さは50cm、底面はローム地山。覆土の状況 自然堆積。遺物 1と2は口縁部片である。1は口縁部が無文帯、胴部が縦位のRL縄文が施される。2は口縁部に「U」字状の沈線を施し、縄文帯と無文帯に区分される。3と4は胴部片である。3は縦位の沈線で区画し、LRの縄文が充填される。4は地文が縦位のRL縄文で、2条の沈線が垂下する。尚、2と3は同一個体である。

#### SK58 (第16・37図)

規模・形状 南北1.6m×東西1.6mの円形。重複関係 SK63と隣接。壁・底面 壁はオーバーハングし、袋状を呈する。確認面からの深さは90cm、底面はローム地山。覆土の状況 自然堆積。遺物 1～7は口縁部片である。1は波状口縁で、隆帯と沈線により区画文をつくり区画内に横位のRL縄文を施す。2は眼鏡状把手を付す。3は隆帯により渦巻文が施される。4は交互刺突文を施し、以下横位のLR縄文を施す。5は口唇部に横位のRL縄文を施し、以下横位の沈線が施される。6は波状口縁部で、連続刺突文、以下に波状の沈線が施される。7は浅鉢形土器で、口縁端部に2条の沈線が施される。8と9は胴部片である。8は地文が横位のRL縄文で、沈線による渦巻文が施される。9は地文が横位のLR縄文で、3条の沈線により渦巻文が施される。10と11は底部片である。10は底径7.5cmで、横位のLR縄文が施される。11は底径10cmである。

#### SK60 (第16・38図)

規模・形状 南北1.6m×東西1.2mの楕円形。重複関係 SK16・SK48と切り合う。壁・底面 壁はオーバーハングし、袋状を呈する。確認面からの深さは50cm、底面はローム地山。覆土の状況 自然堆積。遺物 1は口縁部に交互刺突文と横位の沈線文がめぐり、胴部は地文が撚糸文で、横位の2条の蛇行沈線と沈線が施される。2は波状口縁で、隆帯と沈線により区画文が作られ、区画内にRL縄文が施される。胎土に砂粒、金雲母が多く含まれる。3の口縁部は隆帯と沈線により区画文が作られ、横位のRL縄文が施される。胴部は地文が横位のRL縄文で、2条の沈線が垂下する。4は縦位にLR縄文を施す。5は隆帯と沈線により渦巻文と区画文が作られ、区画内に横位のLR縄文が施される。6は波状口縁で、隆帯と沈線により区画文が作られ、区画内に横位のRL縄文が施される。7は中空把手を付し、横位に2条の沈線がめぐり、8は浅鉢形土器で、口縁端部に沈線による渦巻文が施される。9・10は胴部片である。9は地文がLR縄文で、2条の沈線が垂下する。10は沈線により区画された中に、縦位のLR縄文が施される。11は底部片で、底径が6.2cmである。

#### SK61 (第3・41図)

規模・形状 南北1.6m×東西1.6m。重複関係 SK38と切り合う。壁・底面 壁はオーバーハングし、袋状を呈する。覆土の状況 自然堆積。遺物 1～6は口縁部片である。1は口縁端部に沈線がめぐり、口縁部は隆帯により区画文がつくられる。胴部は縦位のRL縄文が施される。胎土に砂粒、金雲母を多く含む。2は中空把手を付し、その下に横位の沈線が施される。4は隆帯によるS字状文が貼り付けられる。3は波状口縁で、隆帯と沈線により区画文を作り、区画内に横位のLR縄文を施す。5は波状口縁で、端部に沈線による渦巻文が施され、口縁部には隆帯に

より区画文が作られ区画内に縦位の沈線が施される。6は沈線による渦巻文が施される。7は胴部片で、地文が縄文で、その上に沈線による渦巻文が施される。

#### SK62B (第3・39・40図)

**規模・形状** 南北1.3m×東西1mの楕円形。**重複関係** S I 6 2 Aに切られる。壁・底面 壁はオーバーハングし、袋状を呈する。確認面からの深さは50cm、底面はローム地山。**覆土の状況** 自然堆積。**遺物** 1は口縁部に2条の隆帯が2段にめぐり、中空把手を付す。胴部は地文が横位のR L縄文で、3～4条の沈線により渦巻文などが施される。2は口縁部が直立し、上から交互刺突文、半截竹管による押引文、沈線、交互刺突文、2条の沈線により区画された中に刻目を施す。一部に沈線による渦巻文、中空把手を付す。胴部は条線文と燃糸文が施される。3は口縁部に把手を付し、横位と真上からの貫通孔を有する。隆帯部分に沿って刻目と連続爪形文を施す。さらに2条の沈線による楕円形の区画文が施される。胎土に砂粒・金雲母を多く含む。4はほぼ完形品で、口径が20.2cm、器高30.4cm、底径10cmである。口縁部は横位の隆帯が貼り付けられ、その間に波状隆帯が施される。胴部は横位のR L縄文が施される。5は横位の隆帯を貼付け、その下に縦位の沈線が施される。胎土に砂粒・金雲母を多く含む。8と9は底部片である。9は地文が条線文で、横位の4条の沈線が2段にめぐり、その間に2条の波状沈線が施される。底面には網代痕が残る。底径13.6cm。8は胴部中位に横位の2条の沈線がめぐり、その上下に条線文が施される。

#### SK63 (第3・41図)

**規模・形状** 南北1m×東西1mの円形。**重複関係** S I 6 2 Aに切られる。壁・底面 断面逆台形を呈する。確認面からの深さは55cm、底面はローム地山。**覆土の状況** 自然堆積。**遺物** 1は波状口縁で、横位のR L縄文を施し、以下2条の沈線が施される。2は櫛歯状工具による縦位の波状沈線が施される。

#### SK64 (第3図)

**規模・形状** 南北1.3m×東西1.1mの楕円形。**重複関係** SK 5 2・SK 6 5を切る。壁・底面 断面逆台形を呈する。確認面からの深さは55cm、底面はローム地山。**覆土の状況** 自然堆積。**遺物** 実測可能な遺物は無い。

#### SK65 (第3図)

**規模・形状** 南北1m×東西1mの円形。**重複関係** SK 6 4に切られ、SK 5 2を切る。壁・底面 断面逆台形を呈する。確認面からの深さは45cm、底面はローム地山。**覆土の状況** 自然堆積。**遺物** 実測可能な遺物は無い。

#### SK67 (第3図)

**規模・形状** 南北1m×東西1.4mの楕円形。**重複関係** S I 4 2に切られる。壁・底面 壁はオーバーハングし、袋状を呈する。確認面からの深さは77cm、底面はローム地山。**覆土の状況** 自然堆積。**遺物** 実測可能な遺物は無い。

#### SK72 (第3図)

**規模・形状** 南北1.2m×東西1mの楕円形。**重複関係** SK 4 6に切られる。壁・底面 断面逆台形を呈する。確認面からの深さは36cm、底面はローム地山。**覆土の状況** 自然堆積。**遺物** 実測可能な遺物は無い。

### 3 遺構外の出土土器 (第42図)

1は口径29.5cmの深鉢形土器である。微隆起線により口縁部無文帯と胴部縄文帯を区分する。2は口縁部に横位の隆線と蛇行線を貼り付け、その下に隆帯と沈線がめぐる。胴部は横位のRL縄文が施される。3は口縁部に双頭突起をもち、胴部の地文が縦位のLR縄文で、微隆起線により「O」字状の無文帯と縄文帯を区分する。4は波状口縁で沈線により縄文帯と無文帯を区分する。5は沈線により縄文帯と無文帯を区分し、蔽手状沈線が垂下する。6は口縁部が無文で、沈線により胴部を区分し、胴部は刺突文が施される。7は把手部分で、円形の刺突文が施される。8は胴部片で、微隆起線により縄文帯と無文帯を区分する。9は口縁部の把手部分で、円孔が1孔穿たれ、その他の4箇所にも円形の刺突が施される。また、口縁部には沈線が施される。10は胴部片で、胴部上半と下半を沈線で区分し、上半には三角形をモチーフにした沈線を描き、その中に縄文が施される。11は中空把手である。12は隆帯により区画文をつくり、その中に縦位や斜位の沈線が施される。

### 4 土製円盤

土製円盤は、第43図及び第3表のとおりである。

No	最大径 (cm)	最大厚 (cm)	出土位置	No	最大径 (cm)	最大厚 (cm)	出土位置	No	最大径 (cm)	最大厚 (cm)	出土位置
1	2.9	0.8	S I 0 4	12	3.9	0.9	S K 2 5	23	4.0	1.2	ペルト北東部
2	6.4	1.0	S I 0 4	13	4.8	1.1	S K 2 5	24	7.3	1.1	ペルト北東部
3	4.1	1.0	S K 0 7	14	3.8	1.1	S I 2 6	25	3.6	1.0	ペルト北東部
4	3.1	1.0	S K 0 8	15	3.8	0.8	S I 2 6	26	5.8	0.9	C-1 周辺
5	4.6	1.3	S K 1 0	16	6.4	1.1	S I 2 6	27	3.7	1.1	D-1 北西側
6	3.2	0.8	S K 1 8	17	4.6	1.4	S K 3 8 B	28	6.0	1.0	表塚
7	4.4	1.2	S K 2 2	18	3.7	1.2	S I 4 1	29	2.3	0.9	表塚
8	3.3	0.9	S K 2 2	19	4.1	0.7	S I 4 1 No.1	30	4.6	1.1	表塚
9	5.8	1.4	S K 2 2	20	3.4	1.1	S I 4 3	31	4.4	1.0	表塚
10	6.7	1.3	S K 2 4	21	4.3	1.0	S K 0 9	32	4.1	1.1	表塚
11	5.8	1.0	S K 2 5	22	4.4	1.4	S I 0 4	33	6.2	0.9	表塚

第3表 土製円盤一覧表

### 5 石器

石器は、第44～51図及び第4表のとおりである。

1～3は石鏃である。1はSK03、2はSK23の土坑内から出土し、3はS I 4 1の住居跡に伴うものと思われる。4～13は剥片や石核で、石材はチャートがほとんどであるが、6や10のような黒曜石も一部含まれる。

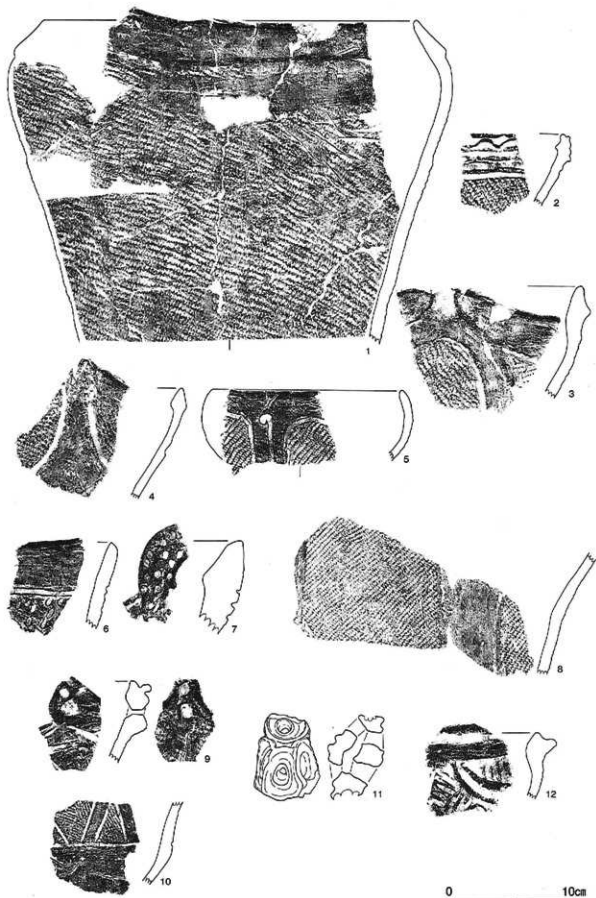
14～19は磨製石斧である。14～18は定角式のもので、大小がみられる。14と15はS I 0 4、16はS I 4 1の住居跡に伴うものと思われる。

21～40は打製石斧で、形状がいわゆる分銅形のものである。その大きさ等は下表のとおりである。

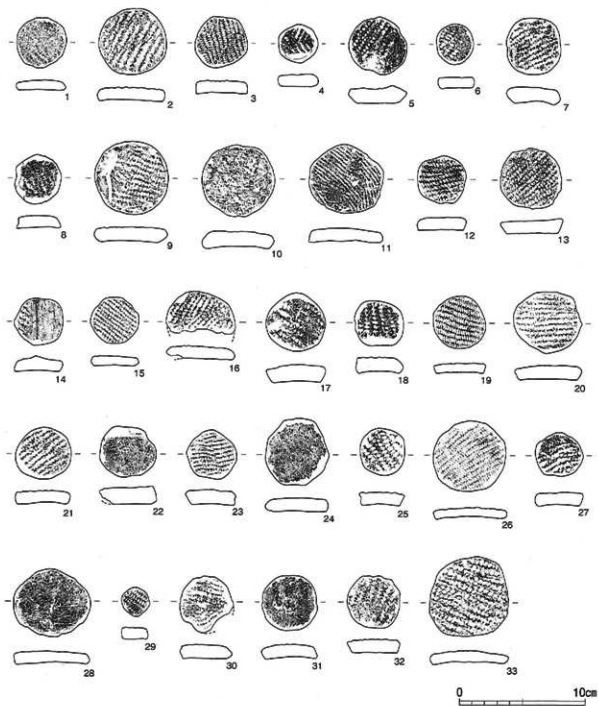
41～63は磨石・蔽石で、楕円形で中央に凹部をもつものが多い。一部に55や62のような円形のものもみられる。

64は石鉢で、半円形の自然石を窪ませた鉢形の石製品である。口径は11cm、器高8.5cmの丸底。凹の深さは6cm。

65・66・68は石皿で、67は蜂の巣石である。68は完形品であるが、その他は破損している。



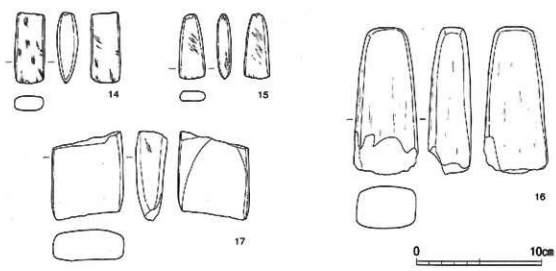
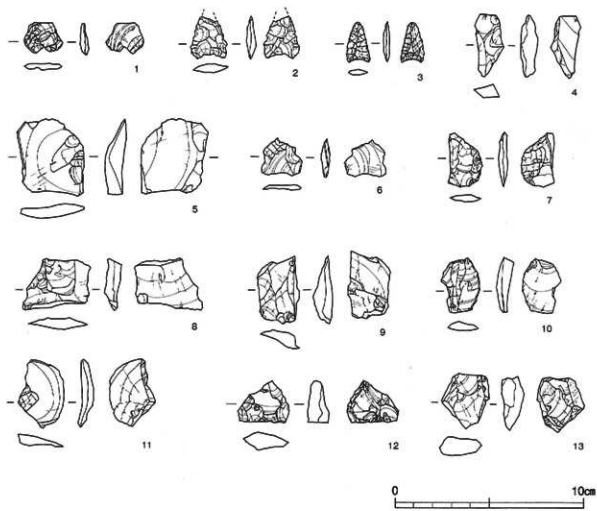
第42図 遺構外の出土遺物実測図



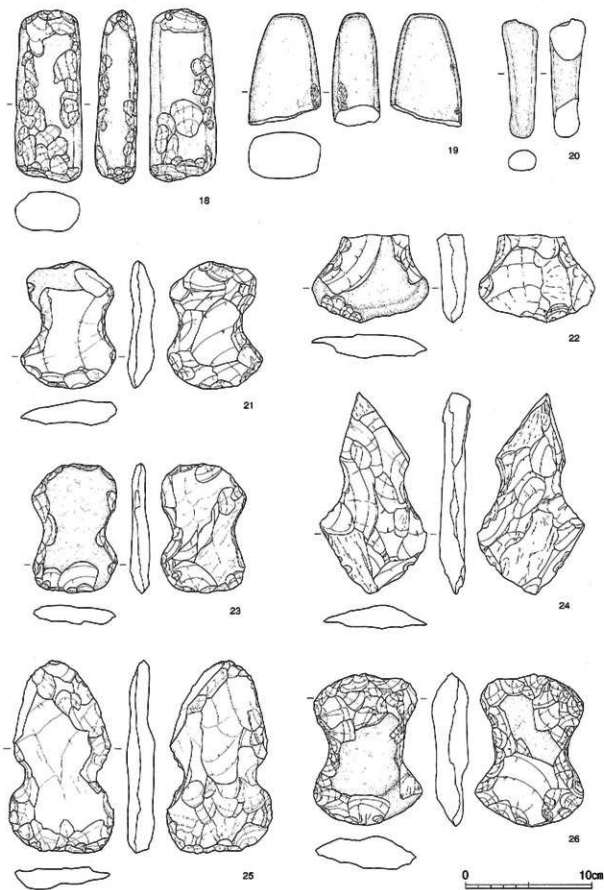
第43圖 土製円盤実測図

No	種別	形状	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	材質	出土位置	備考
1	石鏃	四角	1.6	2.0	0.3	1.1	花崗石	S K 0 3 サブトレイ	方部一部欠損
2	石鏃	四角	(2.3)	1.8	0.4	1.9	地質頁岩	S K 2 3	方部一部欠損
3	石鏃	四角	2.0	1.2	0.3	0.7	地質頁岩	S I 4 1	
4	鏃片	—	3.2	1.4	0.7	3.2	チャート	S I 0 4	
5	鏃片	—	3.3	3.3	0.8	14.4	チャート	表層	
6	鏃片	—	2.0	2.1	0.2	1.2	花崗石	S K 2 5	
7	鏃片	—	2.3	1.9	0.4	2	地質頁岩	S K 3 8 B	
8	鏃片	—	2.2	3.2	0.4	6.3	チャート	S I 4 1	
9	鏃片	—	3.4	2.1	0.7	5.6	チャート	S I 4 1	
10	スタレイベー	—	(2.8)	2.0	0.4	3.1	花崗石	S K 4 7	一部欠損
11	鏃片	—	3.6	2.4	0.5	3.1	地質頁岩	ペルト西西部	
12	石鏃	—	2.2	2.7	0.9	5.2	花崗石	S I 0 4	
13	石鏃	—	2.8	2.3	1.0	8.8	チャート	S I 4 1	
14	磨製石斧	定角式	3.6	2.3	1.2	36	砂岩	S I 0 4	
15	磨製石斧	定角式	5.1	2.0	0.8	19	砂岩	S K 2 5 下層	
16	磨製石斧	定角式	(11.6)	4.9	3.3	330	花崗石	S I 4 1	一部欠損
17	磨製石斧	定角式	(7.0)	5.6	2.3	143	砂岩	P 5 9	一部欠損
18	磨製石斧	定角式	13.7	5.3	3.0	394	凝灰岩	表層	完成品か
19	磨製石斧	定角式	(8.9)	5.6	3.6	280	安山岩	表層	手欠品
20	用途不明	棒状	9.0	2.8	1.6	44.8	凝灰岩	S K 0 6	一部欠損
21	打製石斧	分銅形	10.0	7.5	2.0	151	凝灰岩	S K 0 3	
22	打製石斧	分銅形	(6.2)	9.2	1.8	50	安山岩	S I 0 4	手欠品
23	打製石斧	分銅形	10.3	6.7	1.3	104	凝灰岩	S K 0 6	
24	打製石斧	楕圓形	15.9	8.4	1.9	234	ホルンフェルス	S K 0 7	
25	打製石斧	楕圓形	15.0	7.5	1.6	280	凝灰岩	S K 1 5	
26	打製石斧	分銅形	12.1	8.6	2.7	322	凝灰岩	S I 2 6 №11	
27	打製石斧	分銅形	12.6	9.2	2.5	370	凝灰岩	S K 2 1	完成品か
28	打製石斧	分銅形	(5.8)	6.8	1.3	70	安山岩	S K 2 3	手欠品
29	打製石斧	分銅形	(6.3)	7.1	1.9	120	安山岩	S K 3 0	手欠品
30	打製石斧	分銅形	(9.3)	9.7	1.6	227	安山岩	S K 3 8 B	手欠品
31	打製石斧	分銅形	(6.4)	6.3	1.6	105	凝灰岩	S K 0 6	手欠品
32	打製石斧	分銅形	13.4	9.2	3.2	604	安山岩	S K 3 8 B	
33	打製石斧	分銅形	10.1	7.8	1.9	180	安山岩	S I 4 1	
34	打製石斧	分銅形	(7.5)	9.9	3.4	270	凝灰岩	S I 4 2	手欠品
35	打製石斧	分銅形	10.1	6.9	2.1	160	安山岩	S K 4 6	
36	打製石斧	分銅形	9.4	8.0	1.3	138	凝灰岩	S K 5 4 №1	
37	打製石斧	分銅形	(7.8)	6.9	2.7	195	安山岩	S K 5 8	手欠品
38	打製石斧	分銅形	12.5	6.7	2.1	184	安山岩	表層	
39	打製石斧	分銅形	9.5	6.4	1.3	100	凝灰岩	C 1 埋没	
40	打製石斧	分銅形	11.6	7.8	2.3	239	安山岩	C 1 埋没	
41	磨石	楕圓形	10.2	7.5	5.2	500	凝灰岩	S K 0 3	
42	磨石	楕圓形	14.2	9.3	3.8	560	安山岩	S I 0 4	表裏面凹陥、側面割痕
43	磨石	楕圓形	10.7	8.9	5.1	530	安山岩	S I 0 4	表裏面凹陥
44	磨石	楕圓形	12.7	11.0	4.7	535	安山岩	S K 0 7	裏面凹陥
45	磨石	楕圓形	10.0	7.5	4.8	370	玄武岩	S K 0 7	裏面凹陥
46	磨石	楕圓形	20.3	8.2	5.0	740	安山岩	S K 1 5 上層	一部欠損、破行痕あり
47	磨石	楕圓形	13.1	7.2	5.0	720	安山岩	S K 1 5	下層破行痕
48	磨石	楕圓形	11.0	7.3	5.0	610	安山岩	S K 2 2	表面凹陥
49	磨石	楕圓形	13.6	7.1	3.9	350	安山岩	S K 2 2	表裏面凹陥、上下破行痕
50	磨石	楕圓形	12.4	7.3	4.8	680	安山岩	S K 2 5	側面破行痕
51	磨石	楕圓形	13.7	7.8	4.5	790	安山岩	S I 2 6	表裏面凹陥
52	磨石	楕圓形	9.4	6.5	4.7	434	安山岩	S K 5 2	
53	磨石	楕圓形	13.7	8.9	4.7	830	安山岩	S K 6 5	表裏面凹陥、側面破行痕
54	磨石	楕圓形	15.6	8.3	3.4	680	凝灰岩	A-1 区 №7	表裏面凹陥、側面破行痕
55	磨石	楕圓形	8.4	7.0	4.1	302	安山岩	B-2 区、埋没	裏面凹陥
56	磨石	楕圓形	11.0	7.8	3.0	375	安山岩	C 1 埋没	表裏面凹陥、側面割痕
57	磨石	楕圓形	13.7	7.6	5.0	755	花崗岩	C 2 埋没	
58	磨石	楕圓形	15.3	7.4	4.0	668	安山岩	D-2 枕周辺部	
59	磨石	楕圓形	10.3	8.6	5.3	624	安山岩	D-2 枕周辺部	表面凹陥
60	磨石	楕圓形	12.3	6.5	3.9	420	安山岩	ペルト東部	表面凹陥
61	磨石	楕圓形	16.3	8.3	4.6	856	安山岩	ペルト西西部	表裏面凹陥
62	磨石	円形	8.3	7.9	4.1	340	玄武岩	表層	表裏面凹陥、側面破行痕
63	磨石	楕圓形	13.5	7.0	3.4	474	安山岩	表層	表裏面凹陥
64	小型石皿	球型	(14.3)	—	3.2	205	安山岩	S I 4 1	一部欠損、裏面平磨
65	石皿	—	(14.1)	21.5	8.0	320	安山岩	S K 2 0	一部欠損、右縁
66	石皿	楕圓形	(30.4)	25.2	9.0	7,020	安山岩	S I 4 2	一部欠損、右縁
67	鈴の臺石	—	(10.2)	12.2	5.0	590	安山岩	S K 2 0	一部欠損
68	石皿	楕圓形	18.4	14.8	5.7	1,640	安山岩	S K 0 6	右縁、裏面凹陥多数

第4表 石器一覽表

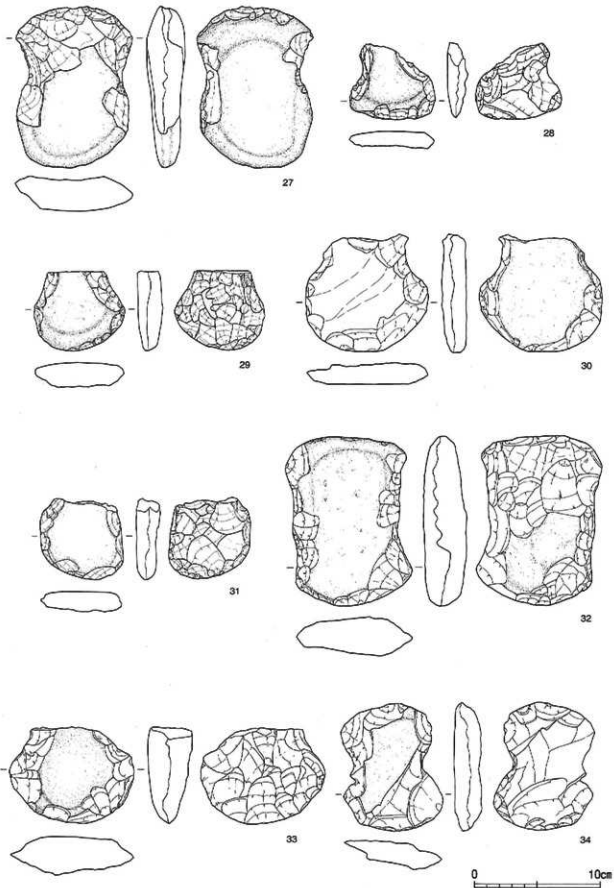


第44图 石器类测图 (1)

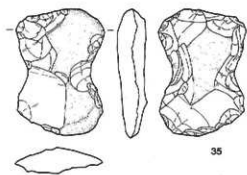


第45图 石器实测图(2)

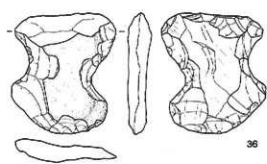




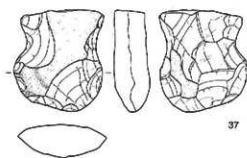
第46图 石器实测图(3)



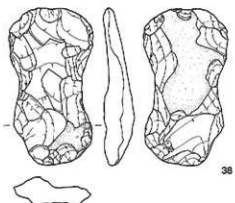
35



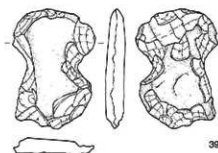
36



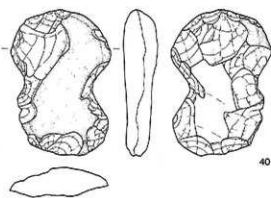
37



38



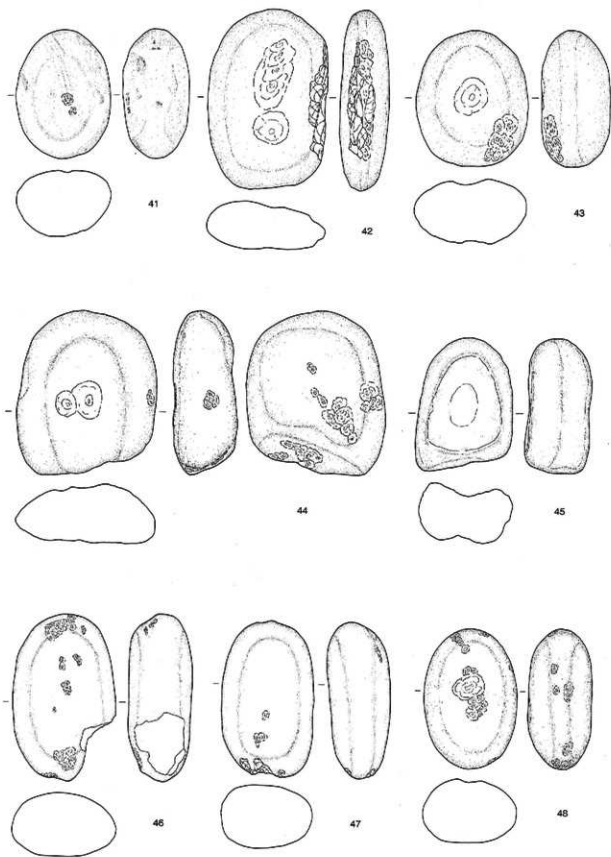
39



40

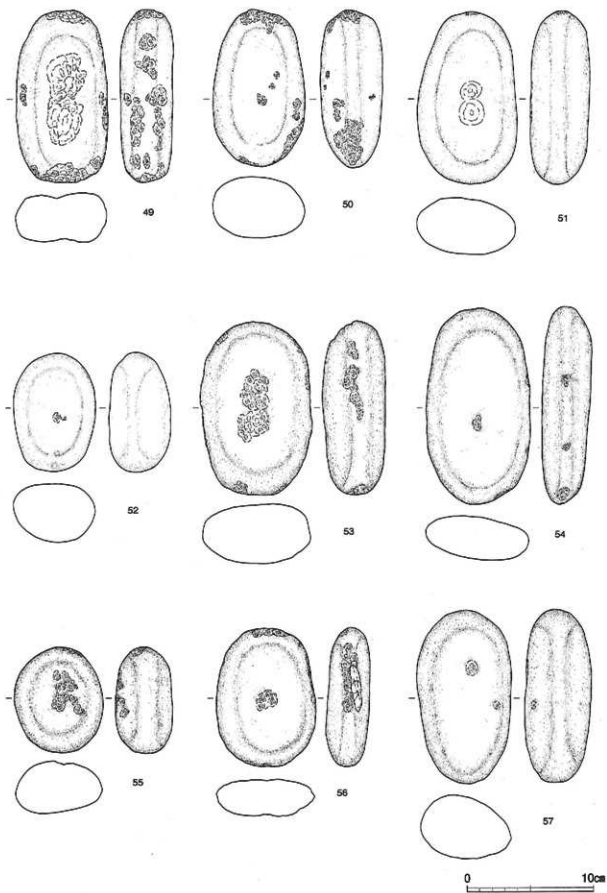


第47図 石器実測図 (4)

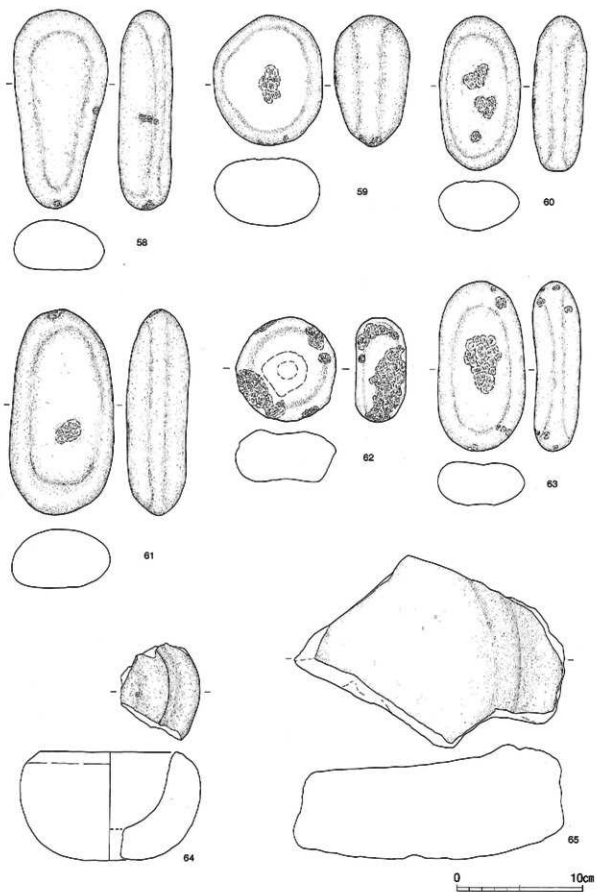


0 10cm

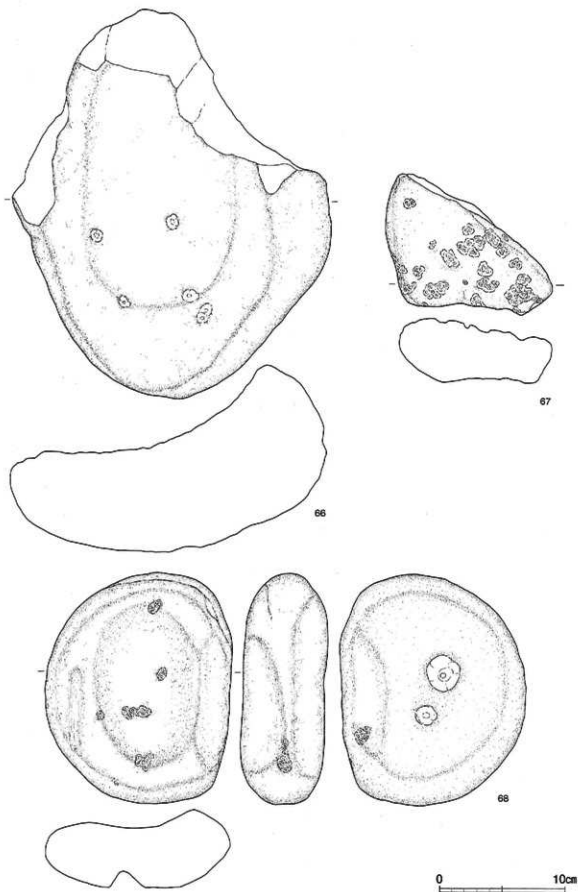
第48图 石器实测图(5)



第49圖 石器実測圖(6)



第50圖 石器実測圖(7)



第51图 石器实测图(8)

### III おわりに

調査の結果、竪穴住居跡11軒、土坑47基が確認された。Iははじめにで記載した通り、今回の調査区は遺跡のほぼ中心部にあたり、ほとんどの遺構が重複している状態で確認された。そのため、切り合い関係が複雑で、十分に整理されていない部分もあるが、現時点でわかった内容について簡単にまとめてみる。

第5表にまとめたとおり、土坑は平面形が円形もしくは楕円形で、断面形が袋状を呈するものと逆台形を呈するものに分かれる。時期的には中期後半の加曾利E式段階のものが多く見られるが、SK21、SK22は中期前半の阿玉台式段階の土坑と思われる。SK07の小ピット内からはキャリバー形をした縄文土器が完形の状態出土している。その形態から加曾利EⅠ式と考えられる。この段階の土坑は他にも、SK20、SK34、SK36、SK44、SK53、SK58、SK62Bなどが挙げられる。SK62Bでは大木8b式の土器と中韓式土器が共存する。

竪穴住居跡はこれらの土坑群と重なり合っていることから明確な形で捉えることができなかったが、いくつかのセクションから、土坑を切っている状況が確認されている。土器も称名寺式を出土するもの(SI04、SI26、SI42、SI55A)、堀之内式を出土するもの(SI41)、加曾利B式を出土するもの(SI38A)など、後期のものと思われる。平面形は楕円形のものも多く、柱穴は壁柱穴で、火処は地床炉(SI04)、石囲炉(SI42、SI43)などがある。住居跡の切り合い関係はSI42とSI43、SI04・SI11・SI28・SI69、SI38A・SI55A・SI41で見られる。SI42とSI43はセクション及びSI43の柱穴と想定されるもの上にSI42の石囲炉が確認されていることから、SI43→SI42の順となる。出土土器も、SI43からは2と3のような口縁部と胴部の境と胴部に縦位に押捺された隆帯が貼付された中部高地系の曾利式と4のように微隆起線により口縁部無文帯と胴部縄文帯を区分する加曾利EⅣ式の土器が見られ、SI42からは7と8のようなJ字状と思われる無文帯を2段に配置する文様帯をもつ称名寺式と思われる土器が出土している。SI38AとSI55Aはセクション図からSI55AをSI38Aが切る。SI38Aからは1の双頭突起をもつ口縁部や9のように微隆起線により胴部縄文帯と無文帯を区分する胴部片などが見られることから加曾利EⅣもしくは称名寺式段階のものが見られる。SI55Aの1は口縁部に横位の沈線とその間に刺突文を施すもので、加曾利EⅡ式段階のものと思われる。SI04の1と2は口縁部無文帯に「O」字状の隆帯を貼付し、微隆起線により胴部縄文帯と無文帯を区分する胴部片などが見られることから称名寺式段階のものと思われる。SI04はSI11とSI28とも切り合うが、セクションでの確認はできていない。SI11とSI28はセクションからSI11→SI28の順が確認できている。SI11は1と2のような胴部が撚糸文で、口縁部が粘土紐を貼り付けて渦巻文や区画文を構成するものや7や9のような沈線により縄文帯と無文帯を区画する磨消帯が見られることから加曾利EⅡ式段階と考えられる。これらのことから、3つの住居跡の順番はSI11→SI28→SI04となる。SI41はSK15・SK17・SK44を切る竪穴住居跡で、円形に壁柱穴がめぐると思われる。出土遺物には幅があり、加曾利EⅣ式のものから、安行併行期の瘤付土器が見られる。

以上、縄文時代中期段階の土坑群と中期末～後期前半を中心とする竪穴住居跡群が重複してい

る状況を確認することができた。

(参考文献)

赤石亮亮・神野安伸1989『竹下遺跡Ⅱ』宇都宮市教育委員会

後藤信祐1996『槻沢遺跡Ⅲ』栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団

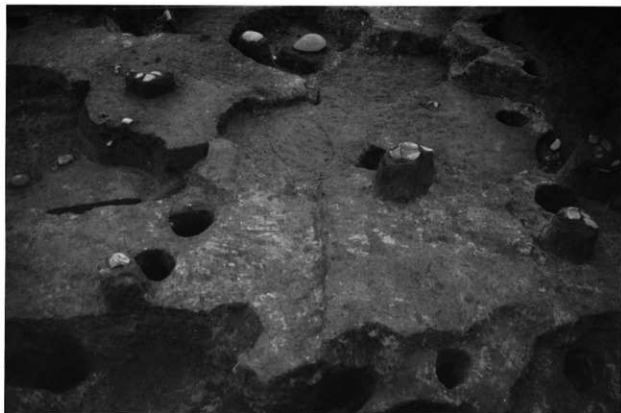
塚原孝一1994『三輪仲町遺跡』栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団

遺構	遺構の種類	形状		規模		基	時期	切り合い関係	備考
		平面	断面	東西	南北				
3	土坑	楕円		1.7	1.35				
4	堀穴住居跡	円形		6	4.8	0.3	地床砂	佛名寺	
6	土坑	円形	袋状	1.45	1.45	0.8		加信利EⅡ	
7	土坑		袋状			0.65		加信利EⅠ	小ピットあり
8	土坑	楕円				0.25			
9	土坑	不整形				0.35		8→9	
10	土坑	楕円	袋状	1.3	1.8	0.9		加信利EⅡ	底部に小石が敷かれている
11	堀穴住居跡	不明						加信利EⅡ	
13	土坑	楕円	袋状	1.6	1.7	1.15		加信利EⅡ	40→13→22
15	土坑	円形	袋状	1.7	1.7	1.25		加信利EⅡ	
16	土坑	楕円		1.2	1.55			加信利EⅡ	
17	土坑	楕円	透台形	1.5	1	0.4			
18	土坑	楕円	袋状	1.15	1.25	0.8			18→4
20	土坑	円形	袋状		1.3	0.75		加信利EⅠ	
21	土坑	楕円		1.9	1.5	0.8		河玉台	21→10
22	土坑	楕円		1.9	2.6	0.8		河玉台	22→13→4
23	土坑	楕円	透台形	1.5	1.25	1.15		加信利EⅠ	40→23→26
24	土坑	楕円		0.7	1.2			加信利EⅠ	
25	土坑	楕円	袋状	2.5	1.5	1.05		加信利EⅠ	
26	堀穴住居跡	楕円		3	-	0.3		佛名寺	
27	土坑	楕円		-	-			加信利EⅠ	
28	堀穴住居跡			-	-				
29	土坑	楕円	袋状	-	1.5			加信利EⅡ	
30	土坑	楕円		1	1.2				
31	土坑		袋状		1.4	0.8		加信利EⅡ	
32	土坑								
34	土坑	円形	袋状	1.4	1.45	0.85		加信利EⅠ	
36	土坑	円形	袋状	1.8				加信利EⅠ	
38A	堀穴住居跡	楕円						加信利EⅣ	38A→55A
38B	土坑	楕円	袋状	1		0.8		加信利EⅠ	
39	土坑	円形	袋状	1.75		1			
40	土坑	楕円			1.2	1			
41	堀穴住居跡	円形		4		0.25		堀之内?	
42	堀穴住居跡	円形			3.8	0.2	石剛砂	佛名寺?	
43	堀穴住居跡	楕円			3.2	0.2	石剛砂	加信利EⅣ	
44	土坑	円形	袋状	1.2	1.2	0.65		加信利EⅠ	44→41
45	土坑	円形		0.65	0.65				
46	土坑	円形		1.9	1.9	0.9		加信利EⅡ	25→46
47	土坑	楕円	袋状	0.75	-	0.9		加信利EⅠ	47→41
48	土坑	楕円			1.9			加信利EⅣ	
51	土坑	方形		0.75	0.9				
52	土坑	方形		1.8	1.9	0.6			52→43
53	土坑	楕円	袋状	1.5	1.7			加信利EⅠ	
54	土坑	楕円		2.4	1.5			加信利EⅡ	
56A	堀穴住居跡							加信利EⅠ前?	55A→38A
55B	土坑	楕円	袋状	1.5					
57	土坑	楕円		1.6				加信利EⅡ	
58	土坑	円形	袋状	1.6	1.6	0.9		加信利EⅠ	
60	土坑	楕円		1.2	1.6	0.5		加信利EⅡ	60→48
61	土坑							加信利EⅠ	
62A	堀穴住居跡								
62B	土坑	円形	袋状		1.3	0.5		加信利EⅠ	
63	土坑	円形	透台形	1	1	0.55			
64	土坑	楕円	透台形	1.1	1.3	0.55			64→65
65	土坑	方形		1	1	0.45			
67	土坑	楕円							
60	堀穴住居跡	楕円		3.8	2.8				
72	土坑	楕円							

第5表 遺構一覧表



# 写 真 图 版



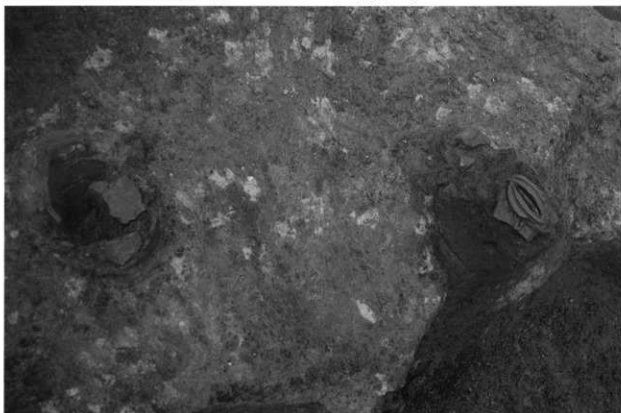
①SI04遺構確認状況（南東から）



②SI04遺物出土状況（南から）



①SI26・SK23セクション（南東から）



②SI26遺物出土状況（西から）



①SI41・SK44セクション（東から）



②SI41遺物出土状況（西から）



①SI43・SK64・SK65遺構確認状況（南から）



②SI43石囲伊完掘状況（北から）



①SI42石囲炉壳掘状況（北から）



②SK10・SK21・SK54確認状況（北から）



①SK07遺物出土状態（西から）



②SK10完掘状況（北から）



③SK15・SI41セクション（南から）



④SK25セクション（南西から）



⑤SK24遺物出土状況（東から）



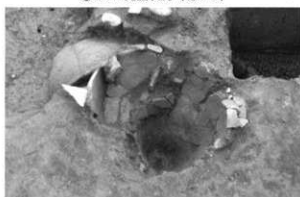
①SK29遺物出土状況 (西から)



②SK47発掘状況 (北から)



③SK47遺物出土状況 (北から)



④SK48遺物出土状況 (西から)



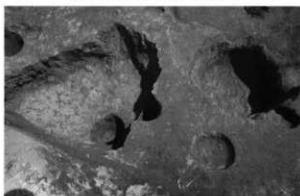
⑤SK53発掘状況 (東から)



⑥SK53遺物出土状況 (東から)



⑦SK58遺物出土状況 (北から)



⑧SK63・SK67発掘状況 (西から)

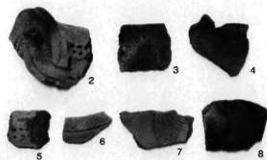




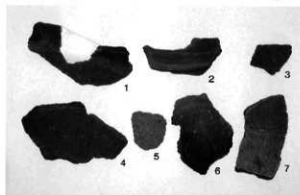
①SK62B遺物出土状況（西から）



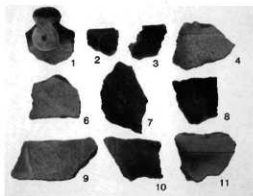
②遺跡全景（東から）



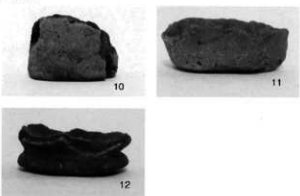
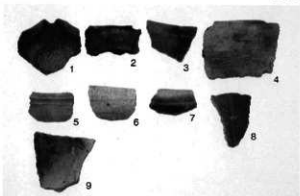
①SI04出土遺物



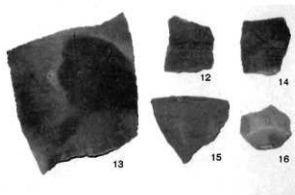
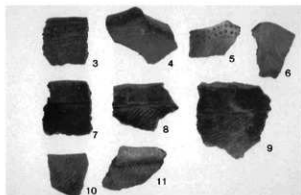
②SI11出土遺物



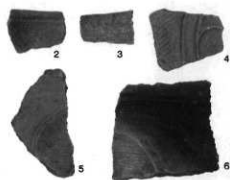
③SI26出土遺物



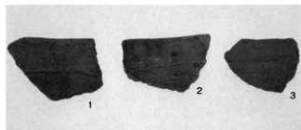
④SI38A出土遺物



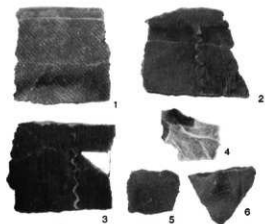
①SI41出土遺物



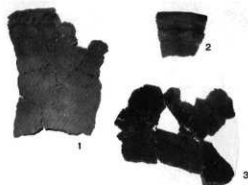
②SI42出土遺物



③SI62A出土遺物



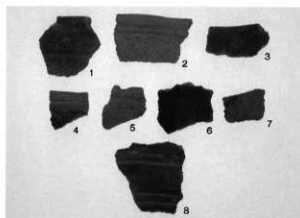
①SI43出土遺物



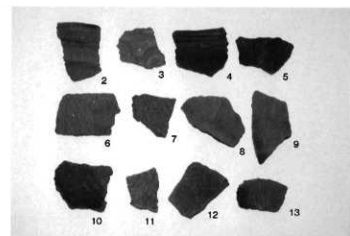
②SI55A出土遺物



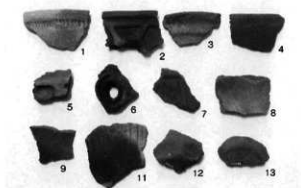
③SK03出土遺物



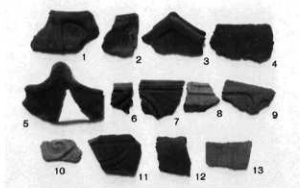
④SK06出土遺物



⑤SK07出土遺物



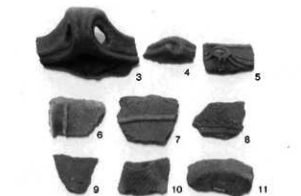
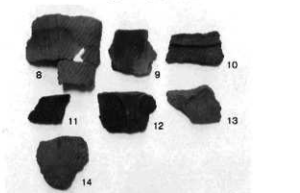
①SK09出土遺物



②SK13出土遺物



③SK10出土遺物

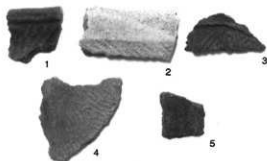


④SK15出土遺物

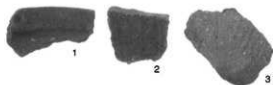




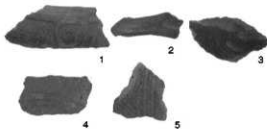
①SK16出土遺物



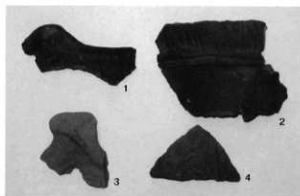
②SK17出土遺物



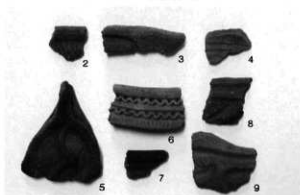
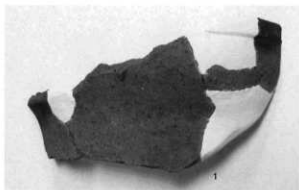
③SK18出土遺物



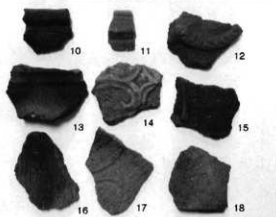
④SK20出土遺物

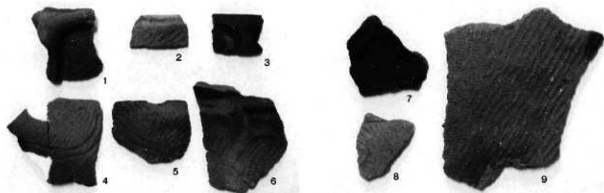


⑤SK21出土遺物

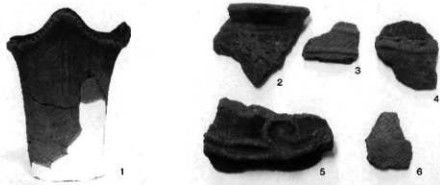


⑥SK22出土遺物

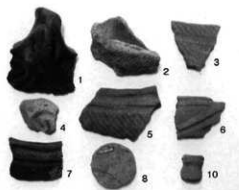




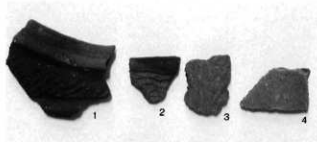
①SK23出土遺物



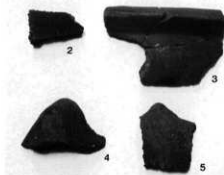
②SK24出土遺物



③SK25出土遺物

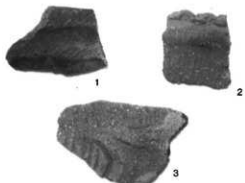


④SK27出土遺物



⑤SK29出土遺物

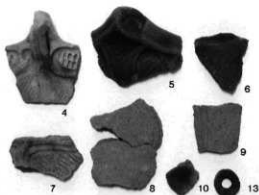




①SK30出土遺物



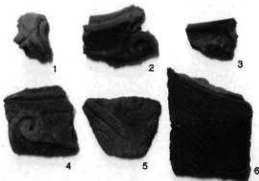
②SK31出土遺物



③SK34出土遺物



④SK36出土遺物

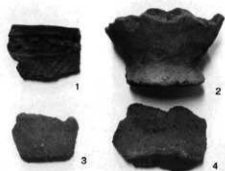


⑤SK38B出土遺物

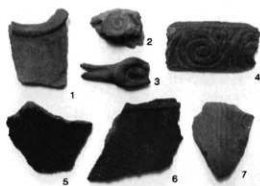




①SK39出土遺物



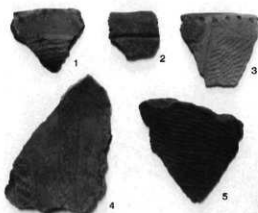
②SK40出土遺物



③SK44出土遺物



④SK45出土遺物



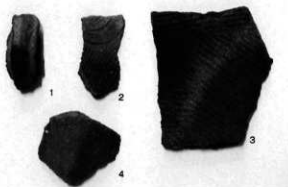
⑤SK46出土遺物



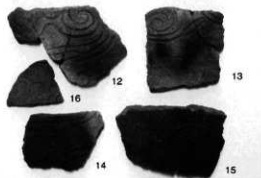
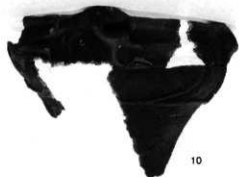
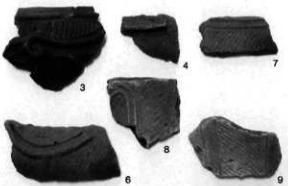
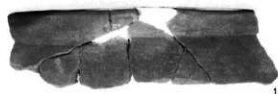
⑥SK48出土遺物 (1)



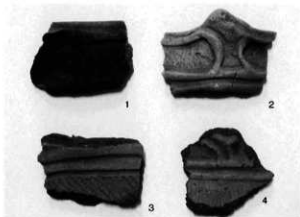
①SK48出土遺物 (2)



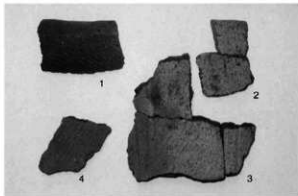
②SK52出土遺物



③SK53出土遺物



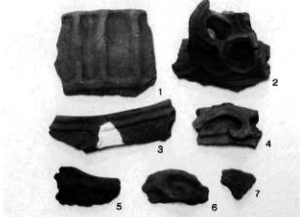
①SK54出土遺物



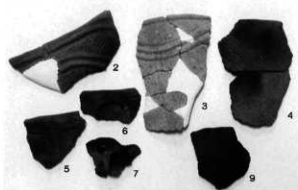
②SK57出土遺物



③SK58出土遺物



⑤SK61出土遺物



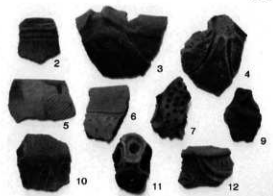
④SK60出土遺物



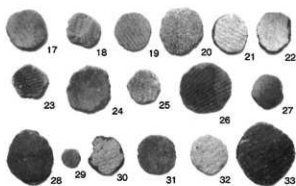
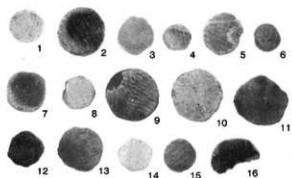
⑥SK63出土遺物



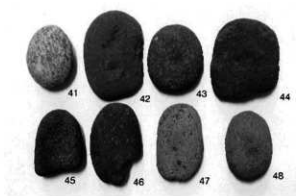
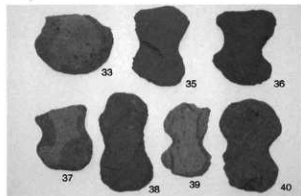
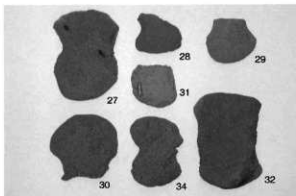
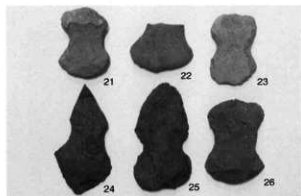
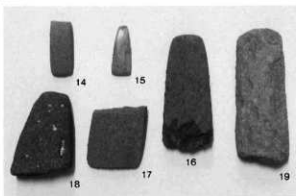
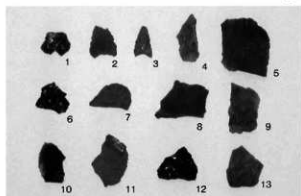
①SK62出土遺物



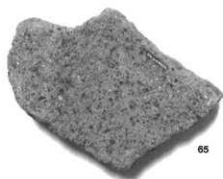
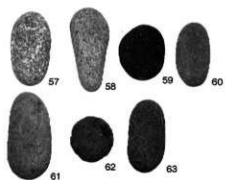
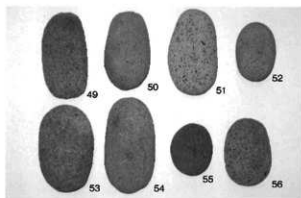
②表探



①土製円盤



②石器 (1)



# 報 告 書 抄 録

ふりがな	たけしたいせき ーだいぎゅうじちようさー
書名	竹下遺跡 ー第IX次調査ー
副書名	
巻次	
シリーズ名	宇都宮市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第85集
編著者名	今平利幸
編集機関	宇都宮市教育委員会
所在地	宇都宮市旭1丁目1番5号 Tm028-632-2764
発行年月日	西暦 2014年(平成26年) 3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たけしさいせき 竹下遺跡	うつみやし 宇都宮市 たけしさい 竹下町	09201		36度 33分 09秒	139度 58分 09秒	20110809 ～ 20110916	500	個人住宅 建設に先 立つ調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
竹下遺跡	縄文	縄文時代	竪穴住居跡 11軒 土坑 47基	縄文土器、打製 石斧、磨製石斧、 石鏃、石皿、蜂 の巣石等	

---

宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第 85 集

竹下遺跡 IX 次

発行 宇都宮市教育委員会  
編集 宇都宮市教育委員会  
宇都宮市旭一丁目 1 番 5 号  
TEL 028-632-2764  
発行日 平成26年 3 月 31 日発行  
印刷 有限会社 印刷親友社  
宇都宮市瑞穂 3 - 9 - 11  
TEL 028-656-3655

---